ベント・ティエン「アンナン国の歴史」簡紹
―情報の流通と保存の観点から―

蓮　田　隆　志

ベトナム前近代史、とりわけ16世紀以降の近世史はこの20年あまりで、急速に史料状況が改善してきた領域の一つである。その中心は①地方村落に所蔵されてきた文書史料および碑刻文、②国家人文・社会科学院所属漢文・チューノム研究院が所蔵する仏領期以来収集されてきた碑刻文の写真版出版、③国家文書保存局所属第一公文書館所蔵文書の外国人への公開、④パリ外国宣教会文書館の非信徒研究者へのアクセス緩和などが挙げられる[1]。

筆者は以前にこのような史料状況を踏まえた上でなお、存在自体は紹介されながらも十分に活用されていない史料が多いことを指摘し、これらのさらなる史料学的検討および活用を主張した[2]。ここに紹介するベント・ティエン「アンナン国の歴史」は、17世紀中葉にキリスト教徒ベトナム人がクオックグー（改造ラテン文字表記ベトナム語）で記したベトナム史である。ベトナム近世史研究において、やはりこれまで知られながらも十全に活用されてきたとは言い難い史料の一つである[3]。本稿では本史料の特徴を指摘した上で、最低限の注釈を付した試訳をあわせて提供する。なお、後述する通り、「アンナン国の歴史」は史料全体の一部である。将来的には他の部分も含めた史料全体に、詳細な注釈を付した完全版の訳注を提供することを目指している。「簡紹」と題する所以である[4]。

Ⅰ．紹介と解説

1．書誌情報

本史料はもともとベント・ティエンBento Thiệnなる人物が当時ローマにいたイエズス会宣

1　史料状況全般についての最新のガイドは、八尾隆生・岡田建志「ベトナム史料」池端雪浦ほか（編）『東南アジア史研究案内』（岩波講座　東南アジア史 別巻）、岩波書店、2003。

2　蓮田隆志「「大越史記本紀続編」研究ノート」『アジア・アフリカ言語文化研究』66、2003、pp. 299-317。

3　管見の限りでは、John K. Whitmore, “Chung-hsing and Cheng-t’ung in Text of and on Sixteenth-Century Viet Nam.” In Keith Taylor and John K. Whitmore, eds. *Essays into Vietnamese Pasts*. Ithaca, New York: Southeast Asian Program, Cornell University, 1995, pp. 116-136; Nhung Tuyet Tran, “Vietnamese Women at the Crossroads: Gender and Society in Early Modern Đại Việt.” Ph.D. dissertation: University of California, Los Angeles, 2004.で一部使用されている。

4　翻訳にあたってはベトナム国家大学ホーチミン市校人文・社会科学大学校東方学部講師で広島大学大学院文学研究科博士後期課程学生のフイン・トロン・ヒエンHuỳnh Trong Hiền氏から多くのご教示をいただいた。記して感謝します。無論、本稿における全ての誤りは筆者、蓮田に帰するべきものである。

教師マリニに宛てて書いた手紙の一部である。原文書は在ローマイエズス会文書館に所蔵されている（ARSI, JS. 81, f.248－259v）。ホアン・スアン・ハンHoàng Xuân Hãnが1959年にはじめて紹介し[5]、1972年にサイゴンでドー・クアン・チンĐỗ Quang Chínhが刊行した『クオッククグー文字の歴史』のなかで解題を付した上で全文の翻刻と原文影印を掲載している[6]。本稿もこのドー・クアン・チンの書に依っている。

本史料の作者ベント・ティエンはベトナム人のカテキスタ（伝道師・同宿[7]）である。本名は不詳で、Thiệnは善などの漢字が当たる。本史料を含む手紙の日付は1659年10月25日で、執筆された場所は当時の都タンロン（昇竜：現ハノイ）である。マリニは1658年７月にベトナムを離れてマカオへ向かったが、そのごローマに戻っている。このとき、トンキンの支配者である鄭氏はカトリック布教に対する弾圧を強め、宣教師に対して都に集まるよう命令を下している[8]。ベント・ティエンは宣教師の通訳としてタンロンにいたのであろう。

本史料は手紙なので元来タイトルはない。手紙は全14ページで、ベトナムにおけるカトリックの現状報告に続いて、３～８ページにベトナムの歴史が綴られている。これに続いてベトナムの習俗や官制・行政区画などが記されている。使用文字はクオッククグー（ラテン文字表記ベトナム語）だが、文字や綴りは現在のものと多少異なっている。「アンナン国の歴史lịch sử nước Annam」というタイトルは、内容からドー・クアン・チンが名付けたものである。全体は21の段落に区切られており、伝説時代から著者の同時代までが時代順に記されている。

２．本史料の重要性

本史料の成立時期ははっきりしている。手紙の日付が1659年10月25日で、執筆に多少の時間をかけたとしても、この年のうちに収まるであろう。通史としては正和本『大越史記全書』（以下、『全書』）はおろか、景治本『大越史記全書』にも先行する。分量は短いものの、編纂時の現物が現存しているという意味では、最古のベトナム史である（表１参照）。

概括的な記述であるため、ファクト・ファインディングのレベルではあまり参考にならないものの、最末尾の「（その結果は）書籍に記されていない。」という記述は重要である。本史料は伝説時代から同時代までの通史であり、かつ公的な編纂史料ではないが、著述に当たって著者ティエンが何らかの先行する書籍を参照したことを示唆している。ここから見

5　Hoàng Xuân Hãn, Một vài văn-kiện bằng quốc-âm tàng-trữ ở Âu-châu. *Đại-Học*, số 10, tháng 7-1959, tr. 108-119.（ホアン・スアン・ハン「欧州所蔵の国音で書かれたいくつかの文献」『大学』10号、1959年７月。筆者未見）

6　Đỗ Quang Chính, *Lich sử chữ Quốc ngữ, 1620-1659*. Sài Gòn: Tủ sách Ra Khơi, 1972, tr. 98-129.（ドー・クアン・チン『クオッククグー文字の歴史：1620-1659』、サイゴン：ザーホイ書房、1972）

7　五野井隆史「イエズス会非会員のコングレサガンと階層化：日本の同宿とトンキンのカテキスタの関わり」『史学雑誌』103-3、1994、pp. 35-73。

8　前掲Đỗ Quang Chính, *Lich sử chữ Quốc ngữ*. tr. 98-99.

表１　17世紀以前のベトナムにおける修史の歴史[9]

	編纂年代	撰者・史料名（*印は佚書）	内容・伝本
①	1273	*黎文休『大越史記』	陳朝皇帝の命で編纂された最初のベトナム史
②	14世紀初	黎崩『安南史略』	地誌。1307年までにほぼ完成、1339年まで加筆。中国で撰述・伝来。
③	14世紀初？	撰者不詳『（大）越史略』	ベトナムには残らず、中国に伝来。おそらく永楽帝のベトナム遠征で持ち去られたもの。李朝末（13世紀初頭）までを記す。
④	1329	李済川『粤甸幽霊集』	陳朝が封号を与えた神々の事績集。序文が1329年だが、15世紀以降に続修されている。
⑤	1428	*黎太祖（口述）『藍山実録』	黎朝の興起について黎太祖が口述したとされるもの。
⑥	1455	*潘孚先『大越史記続編』	陳朝～黎朝の成立まで（13世紀初頭～15世紀初頭）
⑦	1460-1479	*黎朝の正史	黎聖宗が光順年間（1460-69）に命じて編纂を開始、1479までには完成。
⑧	1479	*呉仕連『大越史記全書』	国初から黎朝成立（1428）をカバー。①と⑥をベースに史料を補充して撰述。元々は私撰だが、のちに正史に。呉仕連は⑦の編纂にも途中まで参加。
⑨	1492	武瓊『嶺南摭怪列伝』	説話集。④を含む諸文献から集めた民間伝説集。最初の成立は15世紀末だが、後代の手が加わっている。
⑩	1511	*武瓊『大越通鑑通考』	⑧とほぼ同じ範囲を撰述。独立王朝の初代を丁朝からとする。
⑪	1514	黎嵩『越鑑通考総論』	⑩のダイジェスト。⑮に集録（おそらく⑬にも）
⑫	1557-72	英宗本『藍山実録』	後期黎朝の英宗（在位：1557-72）が、⑤に自分の権威を高めるようなエピソードを加えて頒布したとされる写本。
⑬	1665	*景治本『大越史記全書』	范公著らによる⑧の続修で、1662年まで続修。⑯がこれだという説もある。
⑭	1676	重刊本『藍山実録』・『大越中興功業実録』	前者は⑤を当時の支配者鄭氏に都合の良い様に再編集したもの。後者は後期黎朝の成立史で、やはり鄭氏の栄光を称えるもの。
⑮	1697	正和本『大越史記全書』	黎僖らによる⑬の続修。『全書』現存最古の版。1675年までをカバー。
⑯	17世紀後半～18世紀前半	NVH本「大越史記本紀続編」・A４本『大越史記続編』	一部のみ現存。16・17世紀の歴史について、⑮とはかなり違う記述がある。

て、著者が知識階級に属することは間違いなかろう。公的史書、具体的には『全書』や『大越史略』と比較することで、歴史書編纂とその知識の普及を考える上で重要な材料を提供してくれる。同様に、本史料の冒頭部分は建国神話に充てられているため、『嶺南摭怪列伝』などの説話集との比較もなされるべきである。

筆者はこれまで10年以上にわたって北部ベトナムを中心とする村落調査を行ってきた。さまざまな歴史に関する資料が村落には残されているが、一族の歴史を記したもの（家譜）に史書から一族に関係する部分を抜き書きしたものがせいぜいで、『全書』をはじめとする編纂史書そのものに出会ったことがない。家の歴史と関係しない非公的な「ベトナムの」歴史であり、公的な編纂物から離れた自由な記述の産物と思われるこの史料は、むろんカトリッ

9　主として陳荊和「解題　大越史記全書の撰修と伝本」同（編校）『校合本 大越史記全書（上）』東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター（東洋学文献センター叢刊　第42輯）、1984、pp. 1-47、前掲蓮田「「大越史記本紀続編」研究ノート」、八尾隆生『黎初ヴェトナムの政治と社会』広島大学出版会、2009（とくに序章「藍山蜂起と『藍山實禄』編纂の系譜」）、桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会、2011（とくに序章第二節「史料」）に拠る。

ク布教に資するためという目的を持って作られたものとは言え、独自の価値を持つ。

本稿では言及し得ないが、クオック・グーで書かれているため、ベトナム語史・ベトナム語音韻論、漢字音韻論などにとっても重要な材料であることは言うまでもない。

3.「情報の流通と保存」の観点から見た「アンナン国の歴史」の特徴

ここでは「アンナン国の歴史」の構成と記述とを、ティエンを取り巻く歴史に関する知識や情報の流通・保存の観点から分析する。まず、時代ごとに特徴的な記述を取りあげて、次いで全体的な傾向や特徴を指摘する。その際、訳注編に附してある段落番号を《 》で示す。

独立以前については、まず神農の前に伏羲を置く記述が目を引く《1》。これは『全書』にも『嶺南摭怪列伝』にもない独自の記述である。第５段落以前の神話・伝説時代の記述は、『全書』・『嶺南摭怪列伝』とほぼ一致し、『全書』とは話の配列順も一致している。北属期は非常に簡略だが、趙越王に言及している。趙越王について呉仕連は「按旧史不載趙越王・桃郎王。今采野史及他書、始載越王位号、附桃郎王、補之。」[10]と按語を付しており、ティエンの記述は『全書』の記載と整合的である。また呉権が登場せず、丁部領の即位を以て「以来、アンナンの国はやっと独自の王を持った。」《11》とするが、『全書』系史書で本紀の開始を呉朝から丁朝に改めたのは、武瓊『大越通鑑通考』以降のことであり、ティエンの時代区分が呉仕連版の『全書』そのものに拠っていないことが分かる。

李陳朝時代について特筆されるのは、やや混乱があるものの、前後の時代と比べて皇帝名（廟号）とその順序がおおむね正確なことである。また、李末陳初の動乱についても直接は言及せず、むしろ陳朝への平和的王朝交代が語られている。李昭皇が陳朝初代（太宗）に惚れて結婚し、次いで譲位することで王朝交代が実現したという記述は本史料独自のもので、何らかの民間伝承に拠っているのであろう。李神宗と孔路（空路）との逸話《10》や陳朝皇帝が仏教に傾倒した事への言及《11・12》、数人の皇帝の死[11]を「修行に行くđi tu hành」と表現していること《10・13》などは、この史料がカトリック宣教師に宛てた手紙であるという性格が関係しているのかも知れない。

元寇についての記述がないが、第12段落の「（その治世は）前半は豊作で後半は大日照りで、燃える火が飛んで天まで到り、山々を燃やした。trước thì được mùa sau thì dài hạn, có lửa cháy bay đến trời, cháy núi non」という記述がその比喩なのかも知れない。

胡朝については、胡季犛の出自を胡猻精の末裔とする《14》。胡猻精の話は『嶺南摭怪列伝』に収録されている「夜叉王伝」に由来するもので、通常はチャンパの先世の話とされるものである。これを胡季犛と関連づける説も管見の限り、この史料のみである。また、胡朝に対

---

10 『全書』外紀巻４趙越王紀冒頭（校合本p. 150）。

11 李朝初代（李公蘊。原文では名前も廟号も無し）・李恵宗（原文では憲宗Hiến tông）・陳順宗。後二者は、実際に退位させられた後に寺に押し込められて殺された。

する評価は『全書』などに同じく、非常に厳しいものになっており、後述する莫朝に対する評価と対照的である。

前期黎朝にはいると、一気に情報が錯綜する。まず、皇帝を廟号ではなく年号で記すことが増え[12]、かつそれがしばしば誤っており、名前が記録されない皇帝も出てくる。誤記に属す種類の誤りと判断すべきかも知れないが、官制の充実などが詳しく記されているにもかかわらず、聖宗の事績が太祖もしくは太宗のものとされている点《17》は注意されるべきだろう[13]。

莫朝については胡朝ほど批判のトーンが強くなく、平和と繁栄を強調する記述も多い。現政権からすれば仇敵のはずだが、このような記述は客観的な評価というよりも、地方の歴史記録を反映しているとみなすべきかも知れない。だとすれば、ベント・ティエンは莫朝を支持したデルタ人士の系統に属する人物ということになる[14]。

後期黎朝についての記述はさらに混乱を増す。『全書』系史料において鄭松にあたる人物の業績がチュア・ティエンchúa Tiênなる人物の事績とされるが、これは本史料が著述された同時代にあってはライバルである広南阮氏の初代当主である仙主こと阮潢のことであり、完全に誤っている《18・19》。チュア・ティエンが別途ジャータイなる人物を皇帝に推戴したという記述《18》も史実と異なっている。また、チュア・ティエンこと阮潢は、史実では端国公Đoan quốc côngの爵位を持っており[15]、これは第21段落のông Đoanのことに相違なく、ベント・ティエンは両者が同一人物であることや、鄭松と阮潢の間の姻戚関係も知らないことになる。

後期黎朝の皇帝で記されているのはチンチ［正治］、ジャータイ［嘉泰］、クアンフン［光興］の三名だが、後二者は世宗の年号であって同一人物である。それ以外の皇帝は全く登場せず、阮淦が反莫朝の兵を挙げたときの記述にすら黎朝皇帝を推戴したことが記されていない《18》。同時代における黎朝皇帝の地位を反映しているだけでなく、当時の歴史についての語りにおいても後期黎朝諸帝の存在感が薄いものであったことを示している。

本史料の歴史叙述全体を通してみられる特徴としては以下の四点が指摘できる。まず、対外関係ではチャンパの存在感が目立つ。第10・11・13・17の四段落に戦争ないし外交関係の記述が見られる。これに対して、対中国関係では、李朝期の宋の進攻、陳朝期の元寇ともに記述がなく、両戦役における主将にして現在も救国の英雄として高名なリー・トゥオン・キ

12　莫朝については滅ぼされただけでなく、撰述された当時まで含めて偽朝とされていたために、廟号が伝わっていなかったのかも知れない。

13　この点はウィットモアも注目しているが、意図的な記述だと解釈している。前掲Whitmore, “Chung-hsing and Cheng-t’ung .....”, p. 131.

14　Keith Taylor, “The Literati Revival in Seventeenth-century Vietnam.” *Journal of Southeast Asian Studies*. 18(1), 1987, pp. 1–23; 前掲Whitmore, “Chung-hsing and Cheng-t’ung .....” など参照。

15　1593年５月に端郡公Đoan quận côngから昇進している。『全書』本紀 巻17 癸巳（光興）16年（1593）５月条（校合本p. 899）。

エット［Lý Thường Kiệt李常傑］、チャン・フン・ダオ［Trần Hưng Đạo陳興道］の名も現れない。中華王朝からの侵略撃退は、歴代ベトナム諸王朝において王朝の正当性を示す重要な事象のはずだが、李陳朝期の記述においてこれらが明確に語られない点は極めて興味深い。

次に、国名と地域名の区別が曖昧としているが、正式な国号であるダイヴィエト［Đại Việt大越］は一度も使用されず、一貫してアンナン・アンナンのくに（nước Annam/Anam）という表記がなされおり、そのアンナン［安南］が中国から与えられた地名であるという記述もない。この時代、対中国以外の外交文書でも安南の国号が用いられているが、それ以外の場面でもアンナンという呼称が定着していたことを伺わせる[16]。

逆に中国については、王朝を超えた地域名としてゴー［呉］が用いられている。後掲注21に示したように、この用法は15世紀を遡らず、また『全書』においても15世紀の部分にのみ見られる。第15段落のnhà Ngô（呉朝）という記述は、この用法が当初明朝を対象として成立し、そのご朝代を超えた中国全体を指す呼称として使用法が拡大したことを示している。『全書』の黎朝成立（1428）以降の部分は、景治本編纂の際に追加されたものだが、中国を呉と呼ぶ用例は管見の限り聖宗朝までに限られており、そのご使用が廃れたことを示唆している。本史料は17世紀中葉にいたっても、この用法が残存している証拠となる。

第三に、丁朝以降～前期黎朝成立以前については、皇帝名とその順序などそれなりに整理された情報が存在していたことを伺わせる。前述の通り、末尾の「（その結果は）書籍に記されていない。」という記述は、著者ティエンがこの史料を作成するに当たって何らかの書籍を参照したことを示唆している。ただし、本史料に細かく記されている在位年は、『全書』と一致しないことが多い。よって、呉仕連版『全書』に依拠したわけではないことは確かである[17]。これもまた前述したように、ティエンの手紙にはベトナムの官制や行政区画の情報も記されている。後者については、全国の社レベルまでの行政単位数が府単位でまとめらている[18]。このような情報は何らかの台帳や書籍に当たらなければ書き得ない性格の情報である。そして著者はこのような情報にアクセスしうる立場の人間だったのだ。

ここから逆説的に第四点が浮かび上がってくる。前期黎朝成立以降の混乱は、皇帝の廟号に代わって年号が多く使われているように、記憶もしくは伝承ベースで著述されており、底本となる史籍が著者の手元になかったことを意味していると思われる。すなわち、本史料

16　桃木至朗「近世ベトナム王朝にとっての「わが国」」木村汎、グエン・ズイ・ズン、古田元夫（編）『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』世界思想社、2000、pp. 18-39も参照せよ。

17　陳朝皇帝の在位年については、上皇ではなく皇帝としての在位年に近い。

18　個別の項目ごとの計算とティエンが最後に総括して述べる総数に大きな開きがあるなど問題も多い。例えば、社数の総計を7987と総括しているが、実際に各府の社数を合計すると5000余りにしか達しない（Đỗ Quang Chính前掲書tr. 128）。その数字は、縣レベル以上については桜井の紹介する後期黎朝時代の数字に近いものの、社レベルについては全く異なっている（桜井由躬雄『ベトナム村落の形成』創文社、pp. 141-180）。また、最下級行政単位に「trại寨」が多いという特徴もある。これら点も含めて、別稿にて詳しく論じたい。

は、十六世紀以前の、具体的には武瓊『大越通鑑通考』そのもの、ないしその系統を引く歴史記録を参照しながら撰述されたのであろう。別言するならば、十六世紀初頭以前の修史の成果がティエンのベトナム史のベースであった可能性が高く、鄭松と阮潢の取り違えなどの混乱も、黎朝成立期以降については拠るべき史書のない状況に起因していると想定される。外国人向けに自国の官制や科挙制度の解説を記すことができ、行政区画を列挙して社レベルに到るまでの統計情報を提供できる人間が、数十年前の自国の成立事情について極めて危うい知識しか持っていないのである。となれば、十七世紀後半の修史[19]はこのような状況に対して、記憶を歴史として固定化し、公定史観を確立する作業として位置づけることが可能になる。しかし、その作業自体に複数の流れが潜んでいたのである[20]。

Ⅱ．翻訳・原文・注釈

訳注凡例

・ドー・クアン・チンの付した注は、その内容に合わせて適宜訳文編と原文編とに振り分け、いずれも冒頭に［原注］とつけて、訳者の注と区別する。
・固有名詞は地名・人名などを問わず、すべてカタカナ書きとし、対応する漢字は初出時に［ ］内に記す。対応する漢字表記が確定できないときは、カタカナ表記のみとする。
・( ) は訳者による補足。
・段落区切りは原文通りで、参照の便のために番号を振る。原文編における句読点その他の記号は原文になく、ドー・クアン・チンの書き起こしに基本的に依拠しつつ、訳者の責任において付した。

【訳文編】

1．ゴー［呉］[21]の国にまず最初に王がいてこれをフックヒー［伏羲］という。二代目はタ

19　前掲Taylor, “The Literati Revival in Seventeenth-century Vietnam.”; Do, “Literacy in Early Seventeenth Century Northern Vietnam.” In Michael A. Aung-Thwin & Kenneth R. Hall eds. *New Perspectives on the History and Historiography of Southeast Asia: Cotinuing Explorations*. Abingdon, Oxon: Routledge, 2011, pp. 183-198; 前掲 Whitmore, “Chung-hsing and Cheng-t'ung .....”; 前掲蓮田「「大越史記本紀続編」研究ノート」。

20　前掲蓮田「「大越史記本紀続編」研究ノート」、pp. 315-316。

21　中国のこと。中国を呉と呼ぶ用法は、明朝のベトナム支配から独立する戦いの際に、黎利軍団（黎朝）側が蔑称として用いたことに由来するのであろう。もっとも有名なものは黎朝の明からの独立宣言である「平呉大誥」である。ほかにも『全書』の十五世紀の部分に「呉人」（光順３年春２月11日～３月條（校合本p. 645）、洪德元年夏四月條（校合本p. 678））、阮廌『抑齋集』巻６、輿地志に「國人毌得效呉・占・牢・暹・眞臘諸國語及服装、以亂國俗」（嗣德戊辰年福溪原本（古学院蔵本？ A134本）：Nguyễn Trãi, *Ức Trai tập, tập hạ.* Hoàng Khôi dịch, Sài Gòn: Tủ sách Cổ văn, Ủy ban dịch thuật, Phủ Quốc-vụ-khánh Đặc-trách Văn-hóa. 1972, G 30a）などがある。本史料では、個別の王朝ではなく中国全体の意味で「呉」が用いられている。

ンノン［神農］である。タンノン王の子孫がアンナン［安南］国にやってきて（ここを）治め、キンズオンヴオン［涇陽王］[22]を生んだ。最初、神龍の娘を娶り、そしてラックロンクアン［貉龍君］を生んだ。貉龍君が在位して、娶った妻の名をアウコー［嫗姫］と言い、身ごもって百の卵を産み、（それが）孵って百人の男子になった。そこで、ラックロンクアンは海に下って子供を分けた。五十人は父とともに海に、五十人は母に従って山に登った。みな（？）主となって全域を治めた。

2．さらに代を伝えてフンヴオン［雄王］の代に至る。アンナン国を十八代にわたって治め、みな同じ雄王という名前だった。最後の代（の雄王）は一人の娘を産み、名をミ・チュー［媚珠］[23]という。山精と水精の二柱がやってきて妻にしたいと申し込んだので、フンヴオンは「財宝を携えて先に来た方に娘を嫁がせよう」と言った。山精はバーヴィー山[24]の王であり財宝をもって先に来たので、雄王は娘を嫁がせた。そして（山精はミ・チューを）バヴィ山に連れ帰った。次の日の朝、水精がやってきてたところ、何も残っていないのを見て激怒した。毎年洪水が起こるたびに、ゾンdơng[25]と水とが相い戦っているのだと（人々は）云う。

3．そのご、ゴー人のアン朝［殷朝］のやつらがやってきて雄王を討とうとした。王（雄王）はそこで全国に使者を出し、才能があって強い者がいれば王のために敵を討て、と呼びかけさせた。使者が声を上げながら、ヴーディン縣[26]のフードン［扶董］むら[27, 28]に至ったところ、三歳の男の子がおり、竹のベッドに寝ていた、（この子は平素）動くことも話すこともなかったのだが、声を上げて通り過ぎる使者の声を聞いたところ、そこで（その子は）

22　以降、「王」の漢越語であるvươngは「ヴオン」とカタカナ表記し、「王・君主」を意味するvuaは「王」と訳して表記することを原則とする。

23　『全書』『嶺南摭怪列伝』（「越南漢文小説集成」第一冊、上海：上海古籍出版社、2010）ともに媚娘Mị Nàngに作る。媚珠Mị Chuは金亀伝に出てくる安陽王の娘の名である（第５段落参照）。但し、『嶺南摭怪列伝』の一本（「越南漢文小説集成」版乙本）はどちらも「媚娘」に作る。

24　ハノイ西方の紅河右岸・ダー川右岸にある山。傘圓山núi Tản Viênとも。

25　文脈上、「やま」の意となるはずだが、不明。後考を俟つ。

26　漢字を当てるならば、武定縣だが、そのような名称の縣は存在しない。『全書』（外紀巻１、鴻厖紀、校合本 p.98）では武寧Vũ Ninh部扶董郷、『嶺南摭怪列伝』諸本でも多くが「武寧」となっており、こちらが正しい。なお、唐代の安南都護府隷下の羈縻州に武定州が二つ登場するが（中華書局本『新唐書』p. 1145）無関係だろう。

27　原語はlàng。ムラを意味するベトナム語で漢字表記はない。規模は最下級の行政村（社）と同じかそれより小さい。

28　làng Phù Đổngは現在、ハノイ中央直轄都市ザラム縣のフードン社x. Phù Đổng, h. GiaLâm, TP Hà Nộiとされており、現地には董天王を祀るデンなどがある。

母を呼んで尋ねた「どなたなの？何をしに来たの？」と。母は「王様が遣わした人で、才能があって強い者がいれば王のために敵を討てと知らせているのよ。どうしてお前は起き上がらないままで、王様のために敵をやっつけてお母さんにご褒美をおねだりさせてくれないのかね？」と言った。その子供は母に「お母さん、そのお役人さんをここに呼んできておくれ」と告げた。母はそこでその役人に中に入るよう声をかけ、「私の子供は三歳になりましたが、話すことも歩くこともできませんのに、たったいま奇跡が起きて、私に貴方をうちにお迎えするよう言われたのです。」と申し上げた。役人はそこで問うた。「そこの子供や、お前は王様のために敵をやっつけたいのか？それでお前は俺を呼んだのか？」と。その時、その子供は「お前が俺に王様のために敵をやっつけさせたいのなら、帰って鉄の馬一頭、鉄の棒を作ってここに持ってくるように。それから一緒に大ザル百個分の飯と盥百杯分の酒も私に用意するように、と王様に報告しろ。」と言った。役人が戻って奏上すると、王は喜んでそのようにさせた。王の軍隊は飯と酒を持っていくと、その子供は起き上がって座っており、そのまま大ザル百個分のご飯を、壮丁百人でもとても追いつけないような早さで食べ尽くし、酒の方は（酔っぱらって）悪ふざけしながら次々と盥のまま（杯にいれずにそのまま）飲み干した。そのまま鉄の馬に乗り、大声とともに走ると、（子供の乗った）馬はそのまま先頭を行き、王の軍はこれに続き、ゴーの敵を攻撃しに行き、敵はみんな死に、（その子供は）また茨をむしり取ると［…］そして敵軍を持ち上げると肉を粉々に砕き、手足をへし折った。敵を打ち破るとそのままソック山に登り人と馬とともに空に飛んでいった。アンナンの国はいまでも（この子供を）祀っており、ドンティエンヴオン［董天王］と呼び、俗語ではヴオン・ドンの時代と呼ぶ。

4．最後の代の雄王の後にはトゥックデー［蜀帝］のキンズオンヴオン[29]がおり、ドンガン縣［東岸縣］に城を築き[30]、金の亀を一匹据えた。王は亀の爪を弩の引き金にした。（その弩を）放つと敵はそれを恐れた。

5．その時、チェウ・ヴーホアン［趙武皇］[31]という王がいてアンズオンヴオン［安陽王］を攻めたが、安陽王が弩を取って放つと敵は次々と斃れた。ところで、アンズオンヴオンにはミ・チュー［媚珠］という娘がいた。チェウ・ヴーホアンにはチョン・ティー［仲始］

29　次の段落にあるように、アンズオンヴオン［安陽王An Dương Vương］の誤り。

30　『全書』外紀巻１、蜀紀に見える「螺城」のこと。現在、ハノイ中央直轄都市ドンアイン縣コーロア社x. Cổ Loa, h. Đông Anh, TP Hà Nộiのコーロア城遺跡に比定される。東岸縣は紅河を挟んでハノイと対岸、現在のハノイ中央直轄都市ドンアイン縣からバクニン省トゥーソン縣h. Từ Sơn, t. Bắc Ninhにかけての地域。

31　趙佗（？-137 BCE）のこと。南越の初代王（在位：207 BCE頃-137 BCE）で、武王、ついで南武帝と称した。『大越史略』国初沿革では「武皇Vũ hoàng」の称も用いられている（校合本p. 27）。『大越史略』『全書』ともに趙紀を立ててベトナムの正統君主としている。

という息子がいた。チェウ・ヴーホアンは偽りの義（同盟）で仲直りし、子供たちを結婚させようとした。アンズオンヴオンはそこで子供をチェウ・ヴーホアンの息子に嫁がせた。結婚のときが来て、妻の父（アンズオンヴオン）のところに家を構えた。妻の父が外出したのを見て（チョン・ティーは）妻に尋ねた「お父さんの弩はどこに置いてあるのか？取ってきて私に見せてくれないか？」と。妻は心の中でまったく疑わずに弩を取ってきて見せた。（チョン・ティーが）弩の引き金を盗もうとするとは全く思わなかったのだけれども、（チョン・ティーは）別の弩の引き金とすり替えて返し、（弩の）霊力が自分の父を負かさないようにした。そして妻に告げた。「私は帰国して父王と一緒にいる。あるいは後日に二つの国は愛しあわなくなってしまうかも知れないが、私は君に鵞鳥の上着を残していこう。もし戦争になってお前が父王（アンズオンヴオン）についていかねばならないときは、この羽をむしって私に道が分かるように目印としてくれれば、一緒にいくことができる。」と。そう言ってしばらくの後、（チョン・ティーは）帰国して軍を率いて妻の父を攻撃したが、妻の父は弩にはまだ霊力があると思っていたので、これを放ったが、たしかに魔力は失われていた。敵が攻め込んできたので逃げたが、子（ミ・チュー）も馬に乗って父に続いた。そして夫の言葉に従って（上着の）鵞鳥の羽をむしって夫がついてこられるように目印として捨てた。王（アンズオンヴオン）が逃げて川の近くに至ると、かつてあの爪を（王に）くれた亀と再会した。（亀は）「王の子供（娘）、あいつは敵です。殺しなさい。」といった。王はそこで娘を殺して敵から逃れた。その娘は泣き叫んで言った。「私が愚かだった。夫だから言うことを聞いたのです。親のために何度死んでも悔いはありません、殺して下さい。この血は東の海で真珠に変わるでしょう。」と。その娘（ミ・チュー）が死に、夫（チョン・ティー）は間に合わなかった。（夫は）妻が既に死んだのを見て、そこに一つの深い井戸を見つけ、心から妻を哀れんで、そのまま（井戸に）身を投げて死んでしまった。これ以降、都でとても汚い真珠を見つけた者がこの井戸の水でそれを洗うと美しくなると言う。今まで伝わっている夫婦の縁（の話）です。

6．その後、トー・ディン［蘇定］がやってきてアンナンを征伐した。その時、フンヴオンの子孫の二人の娘がおり、名をチュオン・チャック、チュオン・ニ[32]といい、この二人の女性がトー・ディンを討った。ゴーは連敗し、そこでクアンタイ［広西］に銅柱[33]を立てた。

7．後の時代に、ゴーのハンクアン王［漢光］[34]はマー・ヴィエン［馬援］将軍[35]、リー・ナ

32　チュン・チャックTrưng Trắc［徵側］、チュン・ニTrưng Nhị［徵弐］のこと。

33　銅柱については、吉開将人「馬援銅柱をめぐる諸問題」『ベトナムの社会と文化』3、2001、pp. 389-407。

34　後漢の光武帝のこと。

35　11 BCE-49 CE。後漢の将軍。ハイ・バー・チュンの乱を鎮定した。

ムデー［李南帝］[36]、チャン・バー・ティエン［陳覇先］[37]、チェウ・ヴィエット・ヴオン［趙越王］[38]を、ともにアンナンの国に行って、それぞれを各地方に派遣して治めさせた[39]。その後、ダンヴオン［唐王］[40]は更にカオ・チン・バン［高正平］[41]、更にカオ・ビエン［高駢］[42]を遣わし、天文地理に精通している（カオ・ビエンを）ケー・チョにダイラー城［大羅城］を築くために遣わした。

8．その後、再び乱が起こり、十二のチュア[43]が立ち、各地方にそれぞれ一人いて、互いに争った：一人目はバックハック［白鶴］[44]のコン・ハン［公桿］、二人目はグエン・コアン［阮寛］、三人目はゴーヴオン［呉王］、四人目はニャット・カイン［日慶］、五人目はカイン・タック［景碩］、六人目はスオン・チュック［昌熾］、七人目はグエン・クエ［阮圭］、八人目はグエン・トゥー［阮守］、九人目はグエン・シェウ・ルイ［阮超類？］、十人目はゴー・クアン［呉獷？］、十一人目はキェウ・クアン・コン［矯郡公］、十二人目はバック・ホー［白虎］[45, 46]で、十二人ともが帝王を称し、王（ヴア）を称した。毎日相争い、天下（の

36　李賁（？-547）のこと。541年に叛乱を起こして交州刺史を逐い、544年には即位して「南帝」（『大越史略』では「南越帝」）と称し、国号を「萬春」とした。その後、梁の派遣した陳覇先に敗れて死亡した。

37　503-559年。南朝梁の将軍で、のちに南朝陳の初代皇帝となった（在位：557-559）。

38　趙光復。ベトナム史料（『粤甸幽霊集』およびこれに拠ったと思われる『全書』）では李賁の死後に後を嗣いで王を称し、梁への抵抗を継続し、571年、同盟関係にあった李仏子の騙し討ちに遭って死んだとされる。解説本文も参照。

39　但し、この部分のベトナム語は動詞が足りないために、意味が不明瞭である。

40　唐朝の皇帝のこと。

41　？-791。唐代の安南都護。杜英翰の反乱に遭い都護府を攻囲されて憂死した（『旧唐書』巻13、徳宗本紀、貞元７年（791）夏４月条。中華書局本p. 371-372）。『旧唐書』巻112、李子復伝では「會安南經略使高正平・張應相次卒官」とあり（中華書局本p. 3337）、『安南志略』（巻９、唐安南都督都護経略使交愛驩三郡刺史、高正平。中華書局本p. 217）でも「安南經略」とされている。

42　？-887。唐末の人物。南詔に奪われた安南都護府を奪回し、安南都護・静海軍節度使として数年間半独立政権を作った。ベトナムでは彼を正統君主とする認識もあった。また、地理風水をよくする人物とされ、風水書には彼の名を借りたものもあり、「高王」として祀られている場合もある（前掲桃木「近世ベトナム王朝にとっての「わが国」」。Momoki Shiro, Nation and Geo-body in Early Modern Vietnam: A Preliminary Study through Sources of Geomancy. In Geoff Wade and Sun Laichen eds., *Southeast Asia in the Fifteenth Century: The China Factor*. Singapore: National University of Singapore Press; Hong Kong: Hong Kong University Press, 2010. pp. 126-153）。

43　「主chủ」の変音で、君主の意味。

44　縣名。現在のヴィンフック省ヴィントゥオン社x. Vĩnh Tường, t. Vĩnh Phúc付近。

45　［原注］この十二人を『全書』（1967年、ハノイ刊の訳本、第一巻tr. 151-152）およびTrần Trọng Kim, *Việt-Nam Sử-lược*（サイゴン、1951、tr. 86-87）と比較すると、７人は同じ名が見えるが（コン・ハン、グエン・コアイ、ゴー・ヴオン、ニャット・カイン、カイン・タック、グエン・トゥー、バック・ホー）、残りの５人は多少似ていたり全く違う名前である。

民）は生活を成り立たせることができず、飢えと渇きに憂い悲しんだが、（チュアたちが）互いに争うことは続いて止まなかった。

9．その後、ティエンアン府［天安府］のザーヴィエン縣［嘉遠縣］に一人の人物がおり、田舎の貧乏人のせがれで、姓をディン［丁］と言い、幼い頃に父無し子となり、母は水牛の世話をさせたが、（その子は）子供たちを集めて他の村の子供たちとの戦争ごっこの大将に推された。葦を取って旗とし、自分は王と名乗った。それから家に帰って母親が豚を捌いて子供たちにその肉を与え、犒軍（兵士の慰労）だと言った。しかし、叔父はそのような奇妙なことを見て、災難があるに違いないと、剣を掴んでオイを追い払った。オイは逃げてドー・ディエムの三叉路に至ったところ突然に金の龍が川を横切る形で寝そべっているのを見つけた、オイは橋を渡るようにして（龍の上を通って）逃れた。叔父はそれを見てオイを拝んで帰ってきた。叔父はその渡し場に行って、天下が降伏した[47]。（？が）大楼閣を建て、戦えば勝ち、十二使君に打ち勝った。使君とは以前の十二人の王である。そしてアンナンの国を治め、ディン・ティエン・ホアン［丁先皇］と言う。以来、アンナンの国はやっと独自の王を持った。天下は豊作で豊かになり、誰もこれ以上敢えて乱を起こそうとしなかった。（ディン・ティエン・ホアンは）十二年在位して、（ディン・ティエン・ホアンの）ところには逆心を抱くものがいて、名をドー・ティック［杜釋］と言う。王はこれを信任して自分の手足の近くに侍らせた。深夜に王が寝ていたところ、このものが入ってきて王を殺した。重臣のグエン・トゥック[48]という者がこれを知って、（この者を）捕らえて処罰した。人々は（この者の）肉を一人一口食べた[49]。王には生まれたばか

---

46 『大越史略』の十二史君：①矯三制、名公桿、據峯州。②阮太平、名寛、一名記、據阮家。③陳公覧、名日慶、據唐林。④杜景公、名景碩、據杜洞。⑤阮遊奕、名昌識、據玉槁。⑥阮郎公、名珪、據超類。⑦阮令公、名守捷、據仙遊。⑧呂左公、名獷、據細江。⑨阮右公、名超、據扶列。⑩矯令公、名順、據洄湖。⑪范防遏、名白虎、據藤州。⑫陳名公、名覧、據江布口。（校合本p. 41-42）

『全書』の十二史君：①呉昌熾、據平橋。②矯公桿、稱矯三制、據峯州、今白鶴縣。③阮寛、稱阮太平、據三帶。④呉日慶、稱呉公覧、據唐林、一曰據膠水。⑤杜景碩、稱杜景公、據杜洞江。⑥李圭、稱李朗公、據超類。⑦阮守捷、稱阮令公、據僊遊。⑧呂唐、稱呂左公、據細江。⑨阮超、稱阮右公、據西扶烈。⑩矯順公、稱矯令公、據回湖、今華溪縣陳舎社、猶有城故址存。⑪范白虎、稱范防遏、據藤州。⑫陳覧、稱陳名公、據布海口。（外紀巻5、丙寅16（966）年条。校合本p. 175）

『大越史略』では⑫陳名公、『全書』では⑧呂唐と⑫陳覧以外は、比定可能である。

47 ［原注］この部分は次の様に理解すべきだろう：オジはのちにオイに従い、さらに多くの敵軍もまたやってきて降伏した。

48 ［原注］ドー・ティックを殺害したものの名は、そのとき定国公だったグエン・バック［阮匐］であってグエン・トゥックではない。ベント・ティエンの間違いである。

49 ［原注］グエン・バックは人を使わして逃げたドー・ティックを宮殿内の排水路で捕らえて、命令を下して（ドー・ティックの）骨を粉々に砕き肉を切り刻んで、多くの人に分けて食べさせた。彼らは争ってこれを食べた。

りの男の子が一人おり、母が（その子を）抱いて玉座に座って（国を）治めた。その時、宋賊が、タインホア［清化］[50]とゲアン［乂安］にまでやってきていたので、王の妻[51]はこれをたいへん憂いて「あの賊を打ち倒した者を夫としよう。」と宣言したが、同じムラに才能があって勇猛且つ賢明な大官がいて、そして賊を打ち破って戻ってきた。そこで女王（Bà ấy）は夫に迎えた。しかし、女王の子は６歳で死んだので[52]、（夫は）自らが立って国を治めた。名をレー・ホアン［黎桓］といい、国を治めること十二年で病に罹って死んだ。長男がこれに続いて立って国を治めた、名をチュントン［中宗］といい、三日間だった。ずるがしこい弟が兄を殺して王位を奪って立ち、名をレー・ゴア・チェウ［黎臥朝］といい、酒色にふけり、人を捕らえてはぞっとするような怖ろしいことを行い、王位に登って三年で死んだ。かくしてレー朝は三代十五年で終わった。

10. その後、リー［李］家が王位に登ったが、（この家も）また以前のレー朝の第一の高官である。天下は誠実で善良な人だとして、即位させて王とした。天下太平で豊作で（民は）満腹となり、ケー・チョ[53]に城を築いた。チエム［占］（占城＝チャンパ）が攻め込んできた。ゴーの国のトン［宋］朝の王は（リー朝の王を）ジャオチークアンヴオン［交趾郡王］に封じ、侵略者もなく、豊作だった。王は数人の男子を生んだ。彼らは二百年にわたって君臨した。その（初代の）王は70歳になってすぐに修行に行って[54]、そして子の第二代タイトン［太宗］に位を継がせ、（タイトンは）二十四年治めて、三代目のタイントン［聖宗］に継がせた。天下は平安を得た。（タイントンは）十九年治めて、第四代ニャントン［仁宗］に継がせて（ニャントンが）立って治めたが、天下は豊かだった。しかし王（ニャントン）には男子がおらず、ある子をのちに即位させるために養子とした、名をニャントン［仁宗］[55]という。（仁宗は）六十年治めてやっと五代目のタントン［神宗］に位を継がせた。タントンは（病気になって）野獣に変身してしまい朝から晩までずっと苦しんだところ、コン・ロー［空路］[56]が治療してようやく直った[57]。十一年治めて、第六代アイントン［英宗］に位を継がせた。ひとつも戦乱がなかった。三十九年治めて、第七代カオトン［高宗］に

50　タインホアの漢字表記は、前期黎朝の光順６年（1465）以降、阮朝紹治元年（1841）までの期間が清華Thanh Hoaであり、それ以前と以降の時代は清化Thanh Hoáである。ベント・ティエンの時代は清華Thanh Hoaが正式名称の筈だが、Thanh Hoáと表記されている。

51　［原注］楊太后のこと。

52　［原注］この子供の名はディン・トゥエ、諱をトアンという。『全書』（ハノイ訳本、tr. 159）によると、彼はディン・ティエン・ホアンの第二子で、在位すること８ヶ月だった。レー・ホアンが簒奪し、降して衛王とし、十八才で死んだ。

53　直訳すると市場地域・市場町。現在のハノイ。

54　死の隠喩か。解説も参照せよ。

55　タントン［神宗］の誤り。神宗は仁宗の兄弟崇賢侯の子である。

継位させたが、（カオトンは）聡明で法を作って礼儀も備わった。しかしながら自らの考えに従い賢い臣下の諫言を聞かなかった。王様が天の理に背いたので、天下は不作になり、人々は水牛・牛・鶏・豚と一緒に死んでいき、天の道に背き人心を失った。三十六年治めて、聡明な第八代ヒエントン［憲宗］[58]に継がせた。民は豊かになった。王は男子がおらず、娘が一人いたので、のちにその娘を即位させ、父（のヒエントン）はアントゥー［安子］寺[59]に修行しに行った；その娘こそチェウホアン［昭皇］で、まだ若くて未婚だった。かくしてリー朝は末代となり、二百年以上を治めて終わった。

11. その後、ティエンチャン府［天長府］チャンディン縣［真定縣］ウックハック郷むら[60]の人であるチャン［陳］家に、リー朝の重臣の叔父がおり、ある女性がオイをチェウホアン王に謁見させた。その王（チェウホアン）はその男性が申し分ない男だったので恋に落

56　原綴りはkhổng lồだが、Khổng Lộ［孔路］の誤りで、かつこれはもともと「空路Không Lộ」だったのが、「孔路」と誤って伝わったもの。次注参照。空路は李仁宗の寵を得てこれに近侍し、国師ともなった無言通派に属す禅僧である（川本邦衛「ヴェトナムの仏教」『アジア諸地域の仏教：漢字文化圏の国々』（アジア仏教史 中国編Ⅳ）佼正出版社、1976、p. 274）。『全書』や『禅苑集英』（Cuong Tu Nguyen, *Zen in Medieval Vietnam: A Study and Translation of the Thiền Uyển Tập Anh*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1997所収の影印本）では「空路」となっているが、『嶺南摭怪列伝』では「孔路」に作る写本の方が多い。「越南漢文小説集成」甲本の目録（本文は空路）・同乙本・同丙本、『天南雲録』（越南漢文小説叢刊第２輯（神話伝説類）第１冊、台北：台湾学生書局、1992）が孔路。

57　『嶺南摭怪列伝』「徐道行・阮明空列伝」（越南漢文小説叢刊本）では、明空Minh Khôngの事績とされている。また、『禅苑集英』（59b-60a）と『全書』（本紀巻３、天彰寶嗣４年（1136）３月条。校合本 p. 279）でも、具体的症状の記述は異なるが、狂疾にかかった神宗を明空が治療している。一方、『大南禪苑傳燈輯録』なる史料では、突然虎に変身した神宗を空路が治療したという記述があるという（前掲Cuong Tu Nguyen, *Zen in Medieval Vietnam*, p. 235-236）。但し、そこで空路を治療のために宮廷に呼ぶきっかけとなった童の歌ではやはり『嶺南摭怪列伝』や『禅苑集英』に同じく、“Minh Không”となっている。明空と空路とで「空」が重なり、また明空の師である徐道行の諱も「路」で、さらに三人の活動時期も近いことから、このような混乱が起こったのかも知れない。『大南禪苑傳燈輯録』の伝本は、漢文・チューノム研究院の目録によると嗣德四年（1851）印行の版本一種類のみである。

58　李朝に憲宗はいない。恵宗（フエトンHuệ tông）の誤り。

59　クアンニン省ウオンビ市thị xã Uông Bí, t. Quảng Ninhにある山。陳仁宗が修行をした所とされるベトナムにおける禅宗の中心地で、山頂にはいくつかの仏教寺院のコンプレックスがある。

60　陳朝の故地は、通常、現ナムディン省ミーロック縣のトゥックマク［即墨］とされ、上皇もここにおり、現ナムディン省一帯は天長府ないし天長路府とされ、後期黎朝期にも引き続き同じ名前で存在した。真定縣は属明期以前の史料にその存在を在証できないが（桃木前掲書第八章参照）、『抑齋集』巻６、輿地志、謹案に見られるため、遅くとも16世紀には存在し（G 11b-G 12a。あるいはtr. 761-763）、やはりティエンの時代にも同じ名前で存在している（東洋文庫版『洪德版図』）。ただし、その場所は即墨と紅河を挟んだ対岸の現タイビン省で、陳朝期の行政区画では竜興府に属す。『抑齋集』輿地志謹案および東洋文庫版『洪德版図』の史料批判は、桜井前掲書第２章。

ちた。チェウホアン王は次いでその男性を夫とし、詔を下して天下に知らしめ、夫に王位を譲って治めさせた。五年間不作で、いろんな奇妙な現象が起きて困難に陥った[61]。また詔を出してチエムタイン［占城］を討ち、そのチュアを捕らえて戻った。天下は再び豊作になった。太平になり、王にニャントン［仁宗］[62]という名を付けた。三十九年治めた。

12. さらに子供の第二代タイントン［聖宗］に位を継がせた。（その治世は）前半は豊作で後半は大日照りで、燃える火が飛んで天まで到り、山々を燃やした。七月には洪水が二度宮殿まで流れ込み、人々は船や筏の上で過ごした。また、太陽が二つあるのが見られた。十一年治めて、第三代のニャントン［仁宗］に位を継がせて即位し、法をおいて礼儀が備わった。天下は富貴になった。また寺院を作って寺院で仏を拝んだ。天下は「敢えて釈迦の道に従って真の仏教を捨てた[63]。」と嘲笑った。十四年治めた。

13. そしてアイントン［英宗］に位を継がせたが、彼は第四代で聡明だった。民は富貴になった。十二年治めて第五代のミントン［明宗］に位を伝えたが、（ミントンは）仏教を篤く信じて仏僧を優遇した。八年治めて位を第六代のヒエントン［憲宗］に伝えたが、（ヒエントンは）公平で正直で、（きちんと）祖先の祭祀を行った。そして位を第七代のトゥックトン［肅宗］に伝えた。天下太平。七月に大洪水と日食があり、目の前が深夜のように暗くなった。十二年治めて、次いでザントゥーコン［簡修公］[64]が王位を奪って立ったが、酒色に溺れたために天下の心を失った。即位して十九日で死に、そうしてゲアンに王が立った[65]。チエムタインが乱をなした。三年治めて、弟のズエトン［睿宗］に譲位した。チエムタインに反撃された。五年治めた。簡定皇が王に即位し、敵（チエムタイン）がケー・チョまで追ってきて、宮殿を燃やし尽くした。王が死んでやっと順宗の名を付けた。天下もまた困難に陥った。治めること十年で（順宗は）修行に行った。そして逆心のリー・リー［黎犛］[66]がいて、王を殺して即位した。朝廷は誰も従わなかったので、また子を王位に就けた。かくしてチャン朝は王統を伝えること二十代[ママ]、百七十年だった。

61　この部分は文意不明瞭。

62　第三代に同じニャントンがいるように、ここはタイトン［太宗］の誤り。

63　陳仁宗が竹林派の創始者となったことを指すものか。

64　陳朝代八代皇帝楊日礼のこと。第五代明宗の嫡長子恭粛大王昱の庶子。実の父は楊姓の俳優で、陳朝皇室の血を引いていないとされる。反対者を次々と殺害したが、挙兵した藝宗らに敗れ昏徳王に降されて殺された。但し、ザントゥーコン［簡修公］は前期黎朝の襄翼帝の即位前の爵位で、楊日礼とは関係ない。

65　藝宗（ゲトンNghệ tông）のこと。

66　黎季犛（レー・クイ・リーLê Quý Ly）のこと。陳朝を簒奪したのちに、姓をホー［胡Hồ］と改める。LíはLêの別音か。

14. ホー［胡］氏は逆賊で王となったが、ゲアンのジエンチャウ府［演州府］[67]（の出身で）、ホー・トン・ティン［胡猻精］[68]の後裔で、水精に捕まられないようにタインホアまで逃げた。しかし、元々は狐（の族で）、故郷はダイレンの市[69]で、そこから九代子孫を伝えた。ホー王は学識に優れていたのでチャン氏の王は子供のドゥックゾン公主[70]を嫁がせた。（チャン氏の）王はホー王を封じて大官とした。その後、王が老い、子がまだ若いのを見て、ホー王は国を盗み、自ら王を名乗り、キムバウの地[71]に殿を建てた。チャン王の子のティエンカイン[72]とその一族は恐れて逃げた。ホー王はこれを知って大いに喜んで、王位についた、（ホー王は）銭の鋳造をやめさせて、天下の人々に売買には紙幣を使わせた。またタイドー［西都］[73]に城を作り、天下は大いに辛苦した。（タイドーは）三年がかりで作ってそこに三ヶ月しか居なかった。そして子のハントゥオン［漢蒼］に位を譲り、チャン氏

67　現在のゲアン省北部。

68　『嶺南摭怪列伝』夜叉王伝（「越南漢文小説叢刊」本および「越南漢文小説集成」丙本所収）に登場する国。この話のモチーフはラーマーヤナに由来するとされるが（Edouard Huber, Etudes indochinoises. *Bulletin de l'é cole française d'extrême-orient*. 5, 1905. p. 168）、胡猻精国とはチャンパ（占城）のことだとされている。『嶺南摭怪列伝』鴻厖氏伝にも、その国の彊域を「北は洞庭湖に至り、南は狐精（孤孫精）国［今の占城］に至る」とあって同様の表現が見られる。

69　『全書』などによれば、胡季犛の故郷はダイライ郷［大吏郷hương Đại Lại］である。グエン・ザイン・フィエットによると、現在のタインホア省ハーチュン県ハードン社キムファットむらlàng Kim Phát, x. Hà Đông, h. Hà Trung, t. Thanh Hóaだと言う。また、この地はマー川の支流レーン川sông Lènが南を走っており、ハードン社東方の国道一号線がレーン川を渡る地点はドー・レーンĐò Lèn（レーンの渡し場）と呼ばれている。ĐàiLènのĐàiをĐại［大］の変音と考えれば、この地名表記はtên chữのĐại Lạiとtên nômのchợ Đò Lènとが混ざり合ってしまった結果と想像することも可能かも知れない（Nguyễn Danh Phiệt, *Hồ Quý Ly*. Hà Nội: Viện Sử học và Nxb Văn hóa Thông tin, 1997, tr. 12；ホアン・ハイ「鄭氏と根拠地汴上（タインホア省ヴィンフック県）についてのいくつかの考察」『中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成』（平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B）課題番号　20320111）研究成果報告書　研究代表者：桃木至朗）、蓮田隆志（訳）、2011、pp. 188-196参照）。

70　不明。胡季犛の妻は徽寧公主Huy Ninh công chúa（陳明宗の子）である。

71　不明。

72　天慶か。天慶は黎利が抗明戦の最終段階で、陳朝の末裔とされる陳暠を擁立した際に立てた年号（1425-1428）である（山本達郎『安南史研究Ⅰ』山川出版社、1950、pp. 709-713）。いま一つの候補は、胡朝が成立した後に、明朝に逃亡してその簒奪を訴え、永楽帝のベトナム遠征の引き金となった、やはり陳朝の後裔を名乗る陳天平Trần Thiên Bìnhなる人物である。彼は明の使節とともにベトナム入りしたところを胡氏に襲撃されて殺害された（同書pp. 279-304）。

73　現在の胡朝城址thành nhà Hồ。タインホア省ヴィンロック県ヴィンロン社とヴィンティエン社x. Vĩnh Long và x. Vĩnh Tiến, h. Vĩnh Lộc, t. Thanh Hóaにまたがっている。1397年に建設を開始して、翌年完成した。都としては1407年に廃城されたが、すくなくとも16世紀までは使用されている。2011年、ユネスコ世界文化遺産に指定された。菊池誠一編『ベトナム胡朝城の研究Ⅰ：15世紀王城跡の史跡整備にともなう考古学的研究』昭和女子大学菊池誠一研究室、2005参照。

の後裔だとふれた。邪なホー王親子は、天下の人心を全く失い、治めること八年で終わった。

15. その時、ゴー朝[74]のヴィンラック［永楽］王[75]は軍を送ってホー王を罰しようとした。ホー王は抗戦し得ず、ゲアンの山に潜伏した。思いがけず、その昔に罰金を科せられた下働きの者がいて、ホー王はその者を投獄したが、逃げ出した。その者はゴー王が「誰であれホー王を捕らえたものはアンナンの国を治める官位を与える。」と触れ回るのを聞いた。その者はそこでさもしい心を抱いて（逃げた）ホー王について行き、王はこの者を真面目な人間だと思った。しかしながら、その者はホー王を捕らえてゴー王に突き出した。その後、（ホー王）をバックキン［北京］に連れ帰った[76]。その者をゴーは彼の師（胡王）に対して不義であるとして殺した。ゴー朝はさらに多くの学生や学識のある者たちを探して、みな捕らえてバックキンに送ってしまった。さもないと後日、（その者たちが）立って（アンナンの）王になろうとするかも知れなかったからである。

16. その後、ダン・ゾンとカイン・ジ[77]がゲアン、タインホア、クアンナム［広南］、トゥアンホア［順化］で軍を募り、チュンクアン［重光］王を担ぎ出して呉を討とうとしたが、ゴーはかえって（彼らを）捕らえてバックキンに送ったが、途上で死んだ。ゴーはアンナンの国を奪い続けること十二年で、全国に城塁を築き、どこであろうと城を築き、アンナン人に髪を留めて呉の習慣に従って長髪にさせて現在に至っている。むかしはアンナンの国（の風習では）髪を切っていた。

17. その後、タインホアの人でラムソン［藍山］が故郷のレー・タイトー［黎太祖］王は、フーダオ［父道］[78]の官にあって、四千人の軍を養い、食事を与え（？）、誰であろうと才能があって賢ければ（受け入れて）養った。天はまた神剣と呼ばれる剣を（彼に）与えた。日夜、ゴー打倒の策を練り、タインホア・ゲアン・クアンナム・トゥアンホアに触れ回り、軍旅を整えてゴーを追い返そうとした。それを知ったゴーは軍を派遣してレー・タイトーを討とうとした。レー王は逃げて村落に登って象を求めた。村落は強い象を与えたので、

74　ここではゴー［呉］は、中国ではなく明朝のことを指している。

75　永楽帝のこと。

76　［原注］おそらく作者は「ホー王は北京に連れ去られた」と言いたかったのだろう。

77　陳簡定に従った鄧容および阮景異のことだろう。『全書』己丑（興慶）3年（1409）春二月条、三月十七日条（校合本p. 500）。

78　ベトナム北部・西北部に分布するタイ系諸民族首長の称号phu-thao, thaoを漢語に写した表記。のちにベトナム語では同音の輔導phụ đạoへと改称される（嶋尾稔「ベトナム黎朝と山地少数民族」（1984年度東京大学文学部東洋史学科卒業論文）、pp. 14-23）。

（山から）攻め下ってクアンナムからゲアンまで（を征服して）、どこで戦おうともゴー軍は敗走し、多くを殺した。ゴーは重ねて将軍リェウ・タン［柳昇］を大軍とともに送り込んだ。人々は、山が削られるまで剣を研ぎ、馬が川の水を飲み干す勢いで、どこに行こうともそこで耕作してそれを食べる[79]、と言った。レー・タイトーは逃げるゴーの軍を追撃して将軍リェウ・タンの首を取り、さらにホアン・フック［黄福］を捕らえ、うち捨てられた死体が田野に満ち満ちた。ゴーはすぐに逃げ帰って、これ以降、（ゴーは）二度とこの地に来ないと心から思った。レー・タイトーは天下を平定して平和をもたらし、そこではじめて名をトゥアンティエン［順天］と改め、治めること三年にして、再び別のタイバウ［大宝］と言う名に改めた。天下は平安になった。王は八十歳の老齢となってタイトン［太宗］に権力を渡し、治めること十年であり、宮殿を造った。その時、ラオの国とブオンの国が進貢してきて臣下になることを請うた。タイトー[80]は治めること九年だった。天下太平で、民は富貴だった。チエムタインのチーチー[81]もまたやってきて臣下になることを請うた。王は（チエムタインを）攻めてチュア・ムロイChúa Lời（mlờy）と男女を捕らえて、アンナンに連れ帰り、荘園に住まわせて王のために耕作させた。（彼らは）肉を食べなかったが、彼らの子孫は今まで肉を食べたら災いに遭うと思っていた。王ははじめて文武班、科台、六部、六科（六科給事中）、翰林東閣、内台（御史台）、外憲（提刑憲察使司）、府県、承司（贊治承政使司）を設け、十二承宣[82]を置いた。天下の人々はどこにでも行くことが出来てどこででも仕事をすることがゆるされて[83]、誰も敢えて強盗をはたらかず何も盗もうとしなかった。治めること十八年で、子のヒエントン［憲宗］に渡し、（ヒエントンは）七年治めて、腹一杯の豊作で、そして死んだ。そこで天下は第三子を王に立て、名をタイチン［泰貞］[84]という。治めること七ヶ月で（死に）、子がいなかったので、（王位は）ドアンカイン［端慶］に王位を渡して彼を立てて王とし、酒色に溺れたので天下の心を失った。そこでホントゥアン［洪順］を王として（彼は）七年治め、グエン国公のチン・サン［鄭憬］[85]が反乱した。天下はそこでクアン・ティェウ［光紹］を立てて王とした。

79　略奪をしないという意味。

80　タイトンの誤り。

81　［原注］チエムタインの将軍ボー・チー・チー（Bô Trì Trì）。［訳注］Bô Trì Trìは逋持持（『全書』本紀巻12、辛卯洪徳２年（1471）2月初5日～初七日條。校合本、p. 685）。

82　広南承宣を増置して十三承宣となるのは洪徳２年（1471）年のこと。

83　ここは文意不明瞭。

84　憲宗（ヒエントン）の次の皇帝は正しくは肅宗で、泰貞はその次の威穆帝の時の年号である。

85　鄭惟憬（？-1516）のこと。開国功臣鄭克復の子孫で前期黎朝末の有力武将。襄翼帝の蜂起に参加し、陳珣の乱を鎮圧して源郡公Nguyên quận côngに封ぜられる。後に襄翼帝を見限って殺害するも、陳暠の反乱軍との戦いで捕まり殺された。八尾前掲書終章も参照せよ。なお、源“国公”Nguyên quốc côngに封じられたという事実は確認されていない。

しかし今度はチャン・カオ［陳暠］が反乱した。王はそこでボーデー［菩提］[86]に移った。天下は不作となった。治めること五年で次いでサンラムの外側に移った。天下は続いて次弟を立てて治めさせたが、その名をカイントン［景統］[87]といい、治めること五年でレー朝は終わった。

18. その後、一人の人物がチェーザーイ[88]におり、名をマク・ダン・ゾン[89]と言い、レー王の力士[90]となりドーザーイという名の官[91]に就き、才能があって聡明かつ剛健だった。レー朝がもはや弱って誰も（人物が）いないのを見て取ると、スー・ドン[92]に戻って軍を作り、軍を進めて国を奪い、自ら王となり、名をミンドゥック［明徳］としたが、（これは）ダイミン［大明］（明朝）のザーティン［嘉靖］の時代のことである。子のダイチン［大正］に譲位した。天下は礼儀が備わり、腹一杯の豊作で、盗みや強盗をするものは誰もいなかった。治めること十一年で死んだ。天下はそこで子を立てたのが憲宗で、またクアンホア［広和］と名を変えた。治めること六年で死んで、そこで子を立てたのがヴィンディン［永定］で、まだ乳飲み子であったが即位した。そこで、叔父のキエムヴオン［謙王］[93]がタインホアやゲアンを征伐して、天下は豊作で富貴で、盗みや強盗はなく、夜に寝る時に犬の鳴き声を聞かない（ほど平和で）[94]、そこで名をカインリック［景暦］、さらに別のクアンバウ［光宝］と改めた。天下は飲み食いして遊びふけっても、憂い事は何にもなかった。五年にしてまたホンニン［洪寧］と名を改め、天下もまた飲み食いして遊びふけっていた。酒色にふけるためにスー・ドンに戻って、（彼らは）功臣王侯の子孫だったけど、天下はそれに従い、豊作も続いた。その時、レー朝は既に滅亡していたが、グエン［阮］姓のフオン国公なる人物[95]は降伏して莫朝に仕えた。すぐにタインホアに帰って、400（人の）軍隊を作った。一方ミンハン［明康］大王[96]は幼い時に父無し子になり、フオン国公

86　ケー・チョの紅河を挟んで対岸。現在のハノイ市ザーラム区。

87　正しくはThống Nguyên［統元、トングエン］であるべき。景統は憲宗の時の年号。

88　不明。

89　莫登庸Mạc Đăng Dungのこと。DongはDungの変音だろう。

90　兵士の階級の一つ。

91　不明。

92　海陽地方のこと。首都からみて東方にあるためにこの呼称がある。莫朝期には「東道」と呼ばれた。

93　莫敬典（？-1580）のこと。莫登瀛の子。莫朝側の有力武将として主に軍事面で長らく莫朝を支えた。

94　盗賊や強盗がいると番犬が吠えるので、その声が聞こえないと言うことは、泥棒や強盗がいないという意味。

95　すぐ後にフン殿ông Hưngとあることから、両者は同一人物で、興国公Hưng quốc công阮淦のこと。阮淦は後期黎朝成立の立役者の一人。

96　原文はMinh Khang Đại Báu。鄭検のこと。鄭検の諡は明康仁智武貞雄略太王Minh Kháng Nhân Trí Vũ Trinh Hùng Lược Thái Vương。báuはvương と同義のvuaの変音か。

とともにおおいに才能がある人物で、一度の食事で鍋七つ分の米を食べ、どこでの戦であろうと勝利した。そのときフン殿は一軍をまかせ、また子供を嫁がせた。その後、フン殿が死に、そのときチュア殿（ミンハン大王）が軍を作って、タインホア・ゲアンの軍を取った。マク朝は何度も攻め込んできて百戦して百敗し、チュア・ミンハンはそのまま（勢力を）拡大してスー・バック[97]に三年駐屯し、マク朝の王はまだケー・チョにおり、誰も勝負を決することが出来なかった。チュア・ミンハンはそこでレー朝の王を立て、その家は今も（この国を）治めている。その王の名はチンチ［正治］という。そのごチュア・ミンハンは年老いて（死に）、長男は軍を率いてマク朝に降り、次男はまだ若く、三千の軍を率いてチンチ王を一緒につれてジア砦[98]に入り、（そこに）十三年いて、賊（マク朝軍）はその外にいて攻め入れなかった。チュア・ティエン様[99]は（チンチの）子を担いで王に立て、名をジャータイ［嘉泰］という。ケー・チョのマク朝の王は名をクアンバウ［光宝］と言い、そこで号を改めてホンニン［洪寧］とし、再び軍を攻め込ませて水を全部排水してしまってタインホアの三府[100]の稲を根こそぎダメにすることを４・５回やって、九ヶ月もタインホアにいてやっと引き上げたこともあった。

19. チュア・ティエンはジア砦の中に三年いて、文武の（臣下たちも）また才智があって民のことを大事にする人であり、また巧みな策を練って、戦うたびに勝利した。チュア（・ティエン）様は扶政してタインホアに攻め込んだが、（その時の王の）名はクアンフン［光興］王で、（勢力を）拡大して各地で打ち勝った；タインホアのクアンスオン［広昌］縣まで攻め込んだ。チュア・ティエンは追撃して千人以上を捕らえて引き上げ、（捕虜に）衣食を与えて帰した。マク朝はこれ以降、二度とタインホアに足を踏み入れることはなかった。

20. その後チュア・ティエン様はダンゴアイ[101]に攻め出て、ヴァンサン［雲床］[102]に進軍してまたマク朝軍と出会って交戦した。チュア・ティエンは「我々は引き上げよう」と言った。マク朝軍は追撃したが、チュア・ティエンはそこで外の海に兵を置いていて、引き返して斬り殺して惨めな死体が、ケー・ヴォー[103]近くの浜辺に満ち満ちた、これを「バイチョイ[104]の戦い」と言う。その後、チュア・ティエンはスー・タイ[105]に攻め込み、多くの（敵を）

97　京北地方のこと。首都からみて北方にあるためにこの呼称がある。莫朝期には「北道」と呼ばれた。

98　万頼冊のこと。現在、現地ではphủ Ría（ジア府）と呼ばれており、タインホア省トスアン県スアンチョウ社xã Xuân Châu, huyện Thọ Xuân, tỉnh Thanh Hoaにある。トスアン県の文化部門幹部とタインホア史学会会長レー・スアン・キーLê Xuân Kỳ氏のご教示による。記して感謝します。

99　阮淦の次男で広南阮氏の創業者である阮潢Nguyễn Hoàngのこと。本稿では一般的敬称のôngを「殿」、王侯への敬称であるđứcを「様」と訳し分けた。

100　紹天・河中・靖嘉の三府。

殺したが、これを「ドンブン[106]の戦い」という。チュア・ティエンの軍は400人に満たない。マク朝の軍は野に満ちるほどの多数で、数えようとしても数え切れないほどだった。チュア・ティエンはそのまま追撃し、ホンニン王は逃げて戦死者は野に満ちた。その後、チュア・ティエンは出撃してケー・チョを破り、トゥオン［常］国公[107]という武将を捕らえ、チュア・ティエンは軍をタインホアに返した。ホンニン王はまたケー・チョに入った。その後、チュア・ティエンはケー・チョに出撃して、ホンニン王は逃げてフオンニャン［鳳眼］縣[108]にいたり、そこから川を下って故郷のチェーザーイに戻った。チュア・ティエンはさらに軍を派遣して、そのまま（ホンニン王を）捕らえてケー・チョに連行した。天下はそして平安となったので、そこで再びタインホアに戻ってクアンフン王を奉じてケー・チョに出てきて（そこで天下を）治めた。

21. マク朝の一族は逃れてカオバン［高平］に上ったが、どこにいようともチュア様（チュア・ティエン）がこれを捕らえた。アンナンの国は完全に平和になり、レー朝の下で一つになった。一方、トゥイ［瑞］殿[109]の父のドアン［端］殿はかつてのホア［化］[110]にいて、チュア・ティエンは（ケー・チョに）出てきて服属するように求めたが、彼はチュアが（自分を）充分に優待する気がないのを見て取り、彼はまた逃げてクアン［広］（クアンナム）に入ったので、チュア様は（ドアン殿が）タインホアに戻るのではないかと考えた。ホアに既に入っているとは思いもしなかったので、チュア様は（ドアン殿）を追いかけた。しかし追いつくことはできず、またケー・チョに戻り、現在に至るまでその子孫が治めてい

101　鄭氏政権下の北部ベトナムを指すベトナム語の表現。直訳すれば「外側・外の道」で、阮氏治下の領域を指すダンチョンĐàng Trong（直訳すれば内側・中の道）と対になる。桃木はこの内・外の対比を含んだ一対の単語を広南阮氏のアイデンティティを示すものだとしている（前掲桃木「近世ベトナム王朝にとっての「わが国」」pp. 31-33）。ここで鄭氏側の住人でかつ政府ともパイプを持つと思われるベント・ティエンが自らを「外側」と位置づける語を使用していることの意味については、この段落における鄭松と阮潢との取り違え（解説本文参照）と併せて検討すべきだろう。

102　現在のニンビン省ニンビン市TP Ninh Bình, t. Ninh Bình。

103　具体的な場所は不明。1627年にアレクサンドル・ド・ロードやマルケスがここを訪れたという（Đỗ Quang Chính前掲書tr. 60）。

104　直訳は「天を拝す」の意味。

105　山西地方のこと。

106　死者が多かったとの意か？

107　莫朝の有力武将阮倦のこと。

108　現在のバクザン省イエンズン県とルックナム県h. Yên Dũng và h. Lục Nam, t. Bắc Giangにまたがる地域。

109　広南阮氏第２代当主阮福源の爵位瑞郡公Thụy quận côngに由来するものであろう。『全書』系史料での初出はNVH本「大越史記本紀続編」およびA4本『大越史記続編』では1600年５月、正和本『大越史記全書』では1627年１月の記事である。

110　化州。順化の南半分で、現在のトゥアティエン・フエ省t. Thừa Thiên – Huếに相当する。

る。今もまたケー・クアン[111]と戦っている。しかしまだその治乱は分からず、（その結果は）書籍に記されていない。

【原文編】

1．Nước Ngô trước hết mới có Vua trị là Phục Hi. Vua thứ hai là Thần Nông. Con cháu Vua Thần Nông sang trị nước Anam, liền sinh ra Vua Kinh Dương Vương. Trước hết lấy vợ là nàng Thần Long, liền sinh ra vua Lạc Long Quân. Lạc Long Quân trị vị, lấy vợ tên là Âu Cơ, có thai đẻ ra một bao có một trăm trứng, nở ra được một trăm con trai. Mà Vua Long Quân là Thủy Tinh ở dưới biển, liền chia con ra : năm mươi con về cha ở dưới biển, mà năm mươi con thì về mẹ ở trên núi ; đều (?) thì làm Chúa trị mọi nơi.

2．Lại truyền dõi đến đời Vua Hùng Vương, trị nước Anam được mười tám đòi, cũng là một tên là Hùng Vương. Sau hết sinh ra được một con gái, tên là Mị Chu. Một nhà Sơn Tinh, một nhà Thủy Tinh, hai nhà đến hỏi lấy làm vợ, thì Vua cha là Hùng Vương nói rằng : ai có của đến trước thì ta gả con cho. Nhà Sơn Tinh là Vua Ba Vì đem của đến trước, thì Vua Hùng Vương liền gả cho. Bấy giờ liền đem về núi Ba Vì khỏi. Đến sáng ngày nhà Thủy Tinh mới đến, thấy chẳng còn liền giận lắm ; hễ là mọi năm thì làm lụt, gọi là dơng nước đánh mà đánh nhau.

3．Ngày sau có giặc nhà Ân là người Ngô sang đánh Vua Hùng Vương. Vua liền cho Sứ giả[112] đi rao thiên hạ, ai có tài mệnh thì đi đánh giặc cho Vua. Sứ liền đi rao, đến huyện Vũ Đinh, làng Phù Đổng, thì có một con trai nên ba tuổi[113], còn nằm trong trõng[114], chẳng hay đi cũng chẳng hay nói, mà nghe tiếng Sứ rao qua, liền hay gọi me mà hỏi rằng, hỏi rằng[115] : ấy khách nào, đí gì đấy ? Mẹ rằng : Khách nhà Vua đi rao ai mệnh thì đi đánh giặc cho Vua, mà sao con chẳng dậy mà đi đánh giặc cho Vua, cho mẹ ăn mày bổng lộc. Thằng bé ấy bảo mẹ rằng : mẹ hãy gọi quan khách ấy vào đây. Mẹ liền đi gọi quan ấy vào, mới chiềng quan rằng : con tôi nên ba tuổi, chẳng hay nói cũng chẳng hay đi, tôi mới thấy sự lạ, mà khiến tôi ra gọi ông vào. Quan ấy liền hỏi rằng : thằng bé kia, mầy muốn đánh giặc cho Vua chăng mà mầy gọi tao vào ? Bấy giờ thằng bé ấy nói rằng : mầy có muốn cho tao đánh giặc cho Vua, thì về bảo Vua đánh một con ngựa sắt, lại đánh một cái thiết vọt sắt đem đến đây, cùng thổi một trăm nong cơm, cùng một trăm cong rượu cho tao ăn uống. Quan ấy

---

111　クアンナム地方、すなわち広南阮氏のこと。

112　原翻字はSứ giaと誤植している。

113　［原注］nên ba tuổi = lên ba tuổi

114　［原注］trong trõng = trong chõng

115　［原注］hỏi rằngが２度書いてあるのは原文ママ。

liền về tâu Vua thì Vua mừng, liền làm như vậy. Quân quốc Vua liền đem đến cơm cùng rượu, thằng bé dậy ngồi, liền ăn hết một trăm nong cơm, một trăm lực sĩ dọn chẳng kịp, rượu thì cớt cả và cong mà uống. Đoạn liền lên cỡi ngựa sắt ấy, liền hay chạy cùng kêu cả tiếng, ngựa liền đi trước, quân Vua thì theo sau, đi đánh giặc nhà Ngô, giặc liền chết hết, lại giật lấy bụi gai là ngà (?) mà kéo lên mình quân giặc, nát thịt cùng gãy hết chân tay ra. Đánh giặc đoạn liền lên trên núi Sóc mà bay lên trời và người và ngựa. Nước Annam còn thờ đến nay, gọi là Đổng Thiên Vương, nói nôm gọi là đòi Vương Đống[116].

4. Ngày sau hết đời Vua Hùng Vương liền có Vua Thục Đế là Vua Kinh Dương Vương, mà Vua ấy xây thành ở huyện Đông Ngàn mà dựng một rùa vàng. Vua liền lấy vuốt nó mà làm lãy nỏ mà bắn ra đâu thì giặc liền sợ đấy.

5. Thuở ấy có một vua là Triệu Vũ Hoàng sang đánh vua An Dương Vương. An Dương Vương lấy nỏ mà bắn thì giặc liền chết. Mà Vua An Dương Vương sinh ra được một con gái tên là Mị Chu. Vua Triệu Vũ Hoàng thì có con trai tên là Trọng Thỉ. Mà Triệu Vũ giả nghĩa làm hòa thuận, mà hai bên gả con cho nhau. Vua An Dương Vương liền gả con cho con Vua Vũ Hoàng. Đến khi đã lấy được, ở làm nhà cha vợ ; thấy cha vợ đi vắng mặt, thì hỏi vợ rằng : Nào cái nỏ cha để đâu, lấy cho anh xem ? Vợ ngờ là thật dạ thì lấy nỏ ra cho xem. Chẳng ngờ có ý ăn trộm lấy lãy nỏ, mà làm lãy nỏ khác tra vào cho, kẻo còn thiêng đánh được cha mình. Đoạn bảo vợ rằng : anh về nước nhà cùng Vua cha, hoặc là ngày sau hai nước chẳng yêu nhau, thì anh để cho em một áo lông ngan[117] ; ví bằng có đánh [nhau] em [phải] theo Vua cha, thì lấy lông nầy làm dấu cho anh biết đàng mà đi cùng. Nói đoạn về nước nhà lấy quân đánh cha vợ, mà cha vợ ngờ nỏ còn thiêng thì bắn, chẳng ngờ đã mất phép ; mà giặc đánh đến thì chạy, mà con cũng cỡi ngựa theo cha ; mà giữ lời chồng bảo, liền lấy lông ngan bỏ dấu cho chồng theo. Vua chạy đến gần sông thì lại gặp cái rùa ngày trước cho vuốt ấy. [Rùa] liền bảo rằng : con Vua, ấy là giặc, xin vua giết. Vua liền giết con mới khỏi giặc. Nàng ấy kêu khóc rằng : tôi lòng dại, nghe người vì chồng ; cho đạo cha muôn phần, tôi xin chết, máu nầy biến ra hột trai[118] ở ngoài biển Đông. Nàng ấy liền chết, thì chồng theo chẳng kịp. Thấy vợ đã chết, thì đến đấy thấy có một giếng sâu, thì lòng thương vợ, liền gieo mình xuống mà chết nữa. Đến ngày [sau], có ai được hột trai Kinh xấu, thì lấy nước giếng ấy mà rửa, thì lại trong tốt. Ấy là duyên vợ chồng người ấy thì còn truyền đến nay.

---

116 ［原注］đòi Vương Đống は đời Vương Đổng、すわなわちĐổng Thiên Vươngの時代と著者は言いたかったのだろう。

117 ［原注］原文はngănだが、ガンnganの羽根で作った服の意であろう。

118 hạt traiのこと。

6. Ngày sau Tô Định sang làm loạn phạt nước Annam. Khi ấy còn hai con gái là cháu Vua Hùng Vương tên là Trương Trắc, Trương Nhị, là hai đền Bà[119] đi đánh Tô Định. Ngô liền thua, mới lập nên đồng trụ trên Quảng Tây.

7. Đến đời sau, Vua Hán Quảng nhà Ngô lại sai Tướng Mã Viện cùng Lí Nam Đế cùng Trần Bá Tiền, Triệu Việt Vương cùng sang nước Annam mà ở một người một xứ. Đến ngày sau, Vua Đàng Vương lại sai Cao Chính Bằng[120], lại có Cao Biển học phép thiên văn địa lí mà lập làm thành Đại La Kẻ Chợ.

8. Đến ngày sau lại dấy loạn, đặt là mười hai nhà Chúa, ở một người là một xứ, đánh lộn nhau : một là Công Hãn ở Bạch Hạc, hai là Nguyễn Khoan, bà là Ngô Vương, bốn là Nhật Khánh, năm là Cảnh Thạc, sáu là Xương Chức, bảy là Nguyễn Quê, tám là Nguyễn Thủ, chín là Nguyễn Siêu Lụy, mười là Ngô Quảng, mười một là Kiều Quận công, mười hai là Bạch Hổ[121], đều thì xưng làm mười hai đế vương, mà xưng làm Vua. Mọi ngày đánh nhau, thiên hạ ăn màm[122] chẳng được, lo buồn đói khát, những đi đánh nhau liên chẳng có khi đừng.

9. Ngày sau có một người ở phủ Tràng An, huyện Gia Viễn, con nhà kẻ khó quê mùa, tên họ là Đinh, mồ côi cha còn trẻ, mà mẹ khiến đi chăn trâu, mà các trẻ đặt mình lên làm Tướng mà đánh nhau cùng trẻ làng khác, thì lấy bông lau làm cờ, mình thì xưng làm Vua. Liền về nhà bắt lợn mẹ giết cho trẻ ăn thịt, gọi là khao quân. Mà chú thấy sự lạ làm vậy, thì dái phải vạ chăng[123], cầm gươm mà đuổi cháu. Cháu liền chạy đến ngã ba Đò Điềm[124] từ nhiên[125] liền thấy một con rồng vàng, nằm ngang sông, cháu liền đi qua khỏi như đi trên cầu. Chú thấy vậy liền lạy cháu mà trở về. Chú sang bên ấy. Thiên hạ đến đầu. Làm đền đài lâu các, đến đâu đánh thì được đấy, lại đánh được mười hai Sứ quân là mười hai Vua trước. Đoạn trị nước Annam gọi là Vua Đinh Tiên Hoàng. Nước Annam mới có Vua riêng từ ấy. Thiên hạ được mùa giầu có phú quí, mà chẳng có ai dám làm loạn nữa. Trị vì được mười hai năm, thì trong nhà có kẻ làm tôi chẳng ngay, tên là Đỗ Thích. Vua tin nó cho ở chân tay gần mình. Ban đêm Vua nằm ngủ thì nó vào giết Vua ấy. Quan đại thần tên là Nguyễn

---

119 ［原注］đền Bàはđàn Bàのこと。

120 ［原注］Vua Đàng Vương, Cao Chính Bằngはそれぞれ Vua Đường Vương, Cao Chính Bìnhのこと。

121 原翻字はBach Hổとなっているが、原文にdấu nặngの下点が確認できるので、これは誤植である。

122 ［原注］ăn màmはăn làmのこと。

123 ［原注］thì dái phải vạ chăngはthì sợ phải vạ chăngのこと。

124 ［原注］現在のニンビン省ザーヴィエン縣ディエムサー村（làng Điềm Xá, huyện Gia Viễn, tỉnh Ninh Bình）。

125 ［原注］từ nhiênはtự nhiênのこと。

Thục thấy làm vậy, thì bắt mà làm tội nó. Người ta ăn thịt một người một miếng. Vua sinh mới có một con trai, mẹ ẵm lên ngồi ngai mà trị. Khi ấy có giặc nhà Tống, ở Thanh Hóa, Nghệ An thì vợ Vua lo lắm thì rao rằng : có ai đánh được giặc ấy thì Bà ấy làm chồng, thì có một quan cả cũng ở làng ấy, có tài mệnh và khôn ngoan, liền đánh được giặc về, Bà ấy lấy làm chồng. Mà con Bà ấy nên sáu tuổi qua đời, thì mình mới lên trị tên là Vua Lê Hoàn, trị được mười hai năm nên tật mà chết. Con cả liền lên trị, tên là Trung Tông, được có ba ngày. Em qui quái liền giết anh, cướp vì mà lên trị, tên là Lê Ngọa triều, tham trai gái chơi bời, bắt người ta làm sự quái gở dữ tợn, lên trị được ba năm mà chết. Vậy thì nhà Lê ba đời, được mười lăm năm mà thôi.

10. Ngày sau nhà Lí lên trị, cũng là người quan cả ở nhà Lê xưa. Thiên hạ thấy người ngay thảo, thì đặt lên làm Vua. Thiên hạ thái bình được mùa no đủ, làm thành ở Kẻ Chợ. Chiêm sang tấn công. Vua nhà Tống nước Ngô phong cho Giao Chỉ Quận Vương, chẳng có giặc giã, và được mùa. Vua sinh những con trai. Họ ấy trị vì được hai trăm năm. Vua ấy sống bảy mươi tuổi liền đi tu hành, liền truyền cho con là Thái Tông thứ hai, trị được hai mươi bốn năm, lại trị[126] cho Thánh Tông là thứ ba. Thiên hạ được bằng an ; trị được mười chín năm, lại truyền cho Nhân Tông là thứ bốn lên trị, thiên hạ giầu có. Mà Vua chẳng có trai, thì nuôi thì một con, để ngày sau lên trị, tên là Nhân Tông; trị được sáu mươi năm mới truyền cho Thần Tông là thứ năm. Thần Tông phải tật biến ra thân hùm, kêu thâu đêm tối[127] ngày; có thầy Khổng lồ chữa mới đã. Trị được mười một năm, lại truyền cho Anh Tông là thứ sáu. Chẳng có loạn lạc. Trị được ba mươi chín năm, lại truyền cho Cao Tông là con thư bảy khôn ngoan sáng láng, dựng làm lề luật, có phép tắc. Song le theo ý mình chẳng nghe tôi hiền can gián. Thiên hạ mất mùa, người ta cùng trâu bò gà lợn chết hết, vì Vua ở lỗi đạo Trời và mất lòng dân. Trị được ba mươi sáu năm, lại truyền Hiến Tông[128] là con thứ tám, hiền lành. Dân sự giầu có. Vua sinh chẳng có con trai, được một con gái, liền để cho con lên trị, cha đi tu hành ở chùa An Tử ; mà con là Chiêu Hoàng còn trẻ chửa có lấy chồng. Vậy thì nhà Lí đã mạt đời, trị hơn hai trăm năm mới hết đời.

11. Ngày sau nhà Trần là người ở làng Ức Hắc Hương phủ Thiên Tràng huyện Chân Định, có chú làm quan đại thần nhà Lí, liền đem cháu đến chầu Vua Chiêu Hoàng là đền Bà[129]. Mà Vua ấy thấy người trai tốt lành làm vậy thì phải lòng. Bà ấy liền lấy làm chồng mà ra lệnh cho thiên hạ biết, mà để vì cho nhà trị. Năm năm mất mùa, mà trên trời thì làm tai gở lạ khốn nạn. Lại ra lệnh đi đánh

---

126 ［原注］lại trịはlại truyềnのこと。

127 原翻字はtôiと誤植している。

128 ［原注］Huệ tôngが正しい。

129 ［原注］đàn Bà

Chiêm Thành, bắt Chúa nó đem về. Thiên hạ lại được mùa. Thái bằng[130] mới đặt tên Vua ấy là Nhân Tông. Trị được ba mươi chín năm.

12. Lại truyền cho con là Thánh Tông là thứ hai. Trước thì được mùa sau thì dài hạn[131], có lửa cháy bay đến trời, cháy núi non. Tháng bảy thì lụt vào đền hai lần, người ta thì ở những trên thuyền cùng bè. Lại thấy hai mặt trời. Mà trị được mười một năm, lại truyền cho Nhân Tông là thứ ba len trị, đặt có lề luật phép tắt[132]. Thiên hạ phú quí. Lại làm chùa thờ bụt mà ở chùa. Thiên hạ chê cười rằng, dám Đạo Thích Ca[133], mà bỏ đạo chính. Trị được mười bốn năm.

13. Lại truyền cho Anh Tông là thứ bốn thông minh sáng láng. Dân thì phú quí. Trị được mười hai năm, lại truyền cho Minh Tông là thứ năm, mà chuộng dùng đạo bụt, yêu Sãi Vãi. Trị được tám năm, lại truyền vì cho Hiến Tông là thứ sau, ở công bằng chính trực, thờ tổ tiên. Lại truyền vì cho Túc Tông là thứ bảy. Thiên hạ thái bình. Tháng bảy phải lụt cả[134] và có nhật thực, trước mặt trời tối như đêm. Trị mười hai năm, liền có Giản Tu Công ăn cướp vì Vua mà lên, thì mất lòng thiên hạ vì chè rượu trai gái liên. Lên trị được mười chính ngày liền chết, mới có Vua trong Nghệ An. Chiêm Thành làm loạn. Trị vì được ba năm, liền để em là Duệ Tông. Chiêm Thành lại đánh trả. Mà trị được năm năm. Giản Định Hoàng lên Vua, giặc đuổi đến Kẻ Chợ, đốt hết đền đại. Vua chết mới đặt tên Thuận Tông. Thiên hạ cũng khốn nạn. Trị được mười năm liền đi tu hành. Lại có Lí Li[135] là con gian giết Vua mà lên. Triều đình chẳng nghe, lại đặt con Vua lên trị. Vậy thì nhà Trần truyền dõi được hai mươi đời, một trăm bảy mươi năm.

14. Họ Hồ là kẻ nghịch lên làm vua ở Diễn Chu phủ là Nghệ An, dòng dõi là Hồ Tôn Tinh, phải Thuỷ Tinh bắt nó, nó liền trốn đến đất Thanh Hóa. Song le vốn là con cái cáo, nhà quê ở chợ Đài Lèn, đời ấy dõi truyền được chín con trai. Hồ Vương hay chữ nghĩa, Vua Trần liền gả con cho là Công chúa Đức Dong. Vua phủ[136] cho Hồ Vương làm quan lớn. Ngày sau thấy Vua già, còn thì còn trẻ[137], thì Hồ Vương liền ăn cướp lấy nước, xưng mình là Vua, làm đền ở đất Kim Bâu. Con Vua Trần là Thiên Khánh cháu Vua Trần sợ liền trốn đi. Vua Hồ thấy vậy thì mừng lắm, liền lên làm

---

130 ［原注］Thái bình

131 ［原注］đại hạn

132 ［原注］phép tắc

133 ［原注］dám theo ĐạoThích Ca

134 ［原注］lụt lớn

135 ［原注］Lê Quý Ly

136 ［原注］おそらくVua phongであろう。

137 ［原注］con thì còn trẻ

Vua, mà đúc tiền chẳng nên thì khiến thiên hạ mua bán ăn tiền giấy ; lại lập làm thành Tây đô, thiên hạ khó nhọc lắm ; làm ba năm ở ba tháng mà thôi. Lại truyền cho Hán Thương là con, rằng cháu họ Trần. Hai cha con Vua Hồ gian tà, làm cho mất lòng thiên hạ lắm, trị được có tám năm mà thôi.

15. Thuở ấy Vua Vĩnh Lạc nhà Ngô sai quân sang phạt Vua Hồ. Vua Hồ đánh trả chẳng được, thì vào ẩn Nghệ An trên núi. Chẳng ngờ có một đứa phải vạ xưa mà Vua Hồ cầm tù nó, mà trốn khỏi. Nó nghe rằng, Vua Ngô rao rằng : ai bắt được Hồ Vương thì cho làm quan cai nước Annam. Nó liền tham sự ấy mà đi ở cùng Vua Hồ, thì Vua ngờ là nó thật thà. Chẳng hay nó bắt lấy Vua Hồ đem đi nộp cho Vua Ngô. Ngày sau đem về Bắc Kinh. Thằng ấy thì Ngô lại giết nó vì nó chẳng có nghĩa cùng Thầy nó. Nhà Ngô lại tìm bao nhiều học trò hay chữ nghĩa mà bắt về Bắc Kinh cho hết, kẻo ngày sau bày đặt lên làm Vua chăng.

16. Ngày sau có Đặng Dong[138], Cảnh Dị lo toan làm quân[139] Nghệ An, Thanh Hóa, Quảng Nam, Thuận Hóa, thì rước lấy Vua Trùng Quang ra mà đánh Ngô, mà Ngô lại bắt được đem về Bắc Kinh liền chết giữa đàng. Ngô liền cướp lấy nước Annam, ở được mười hai năm, làm thành lũy mọi nơi, ở Xứ nào thì làm thành Xứ ấy, mà bắt người Annam để tóc dài theo thói Ngô cho đến nay ; xưa thì nước Annam cắt tóc.

17. Đến ngày sau Vua Lê Thái Tổ là người đất Thanh Hóa, quê ở Lam Sơn, làm quan Phụ đạo, nuôi được bốn nghìn quân, cơm chín (?), ai có tài khôn ngoan thì nuôi. Trời lại cho gươm gọi là Thần kiếm. Đêm ngày lo toan chước, sắm sửa, đánh trả Ngô, thì rao hết Thành Hóa, Nghệ An, Quảng Nam, Thuận Hóa, làm quân mà sắm sửa đánh trả Ngô ; thì Ngô thấy vậy thì sai quân đánh Vua Lê Thánh Tổ. Vua Lê liền chạy lên làng đòi voi. Làng liền cho voi mệnh[140], mới mở xuống Quảng Nam, Nghệ An, mà đánh ra đến đâu thì quân Ngô chạy đấy, mà giết nhiều người lắm. Ngô lại sai Tướng Liễu Thăng cùng nhiều quân lắm. Người ta rằng, mài gươm mòn trái núi, ngựa thì uống cạn nước sông, đến đâu thì cày cấy ăn đấy. Vua Lê Thái Tổ đuổi Ngô chạy, lền chém được Tướng Liễu Thăng, lại bắt được Hoàng Phúc, quân chết bỏ đầy đồng. Nhà Ngô liền thể, liền trở về, rằng, tự nầy về sau chẳng sang ở đến đây nữa. Vua Lê Thái Tổ dẹp đã an thiên hạ, mới đổi tên là Thuận Thiên, trị được ba năm lại đổi tên khác là Thái Báu. Thiên hạ bằng an. Vua đã tám mươi tuổi già, liền để quyền cho Thái Tông, lên trị được mười năm, làm nên đền các. Bấy giờ nước Lào, nước Buòn[141] tấn

---

138 ［原注］Đặng Dung

139 ［原注］làm quânはmộ quân（軍を募る）の意味。

140 ［原注］voi mạnh.ここまででも著者は多くの箇所でmạnhをmệnhと綴っている：例えば、tài mệnhはtài mạnhのことであって、才能があって強健だという意味である。

cống[142] làm tôi. Vua Thái Tổ trị được chín năm. Thiên hạ thái bình, dân phú quí. Chiêm Thành Trì Trì cũng đến làm tôi. Vua đi đánh bắt được Chúa Lời[143] (mlòy), trai gái, đem về nước Annam cho ở trại làm ruộng cho Vua. Song le nó chẳng có ăn thịt, cho đến nay cháu con nó ăn thịt là họa. Vua mới đặt có bên Văn Vũ, Khoa Đài, Lục Bộ, Lục Khoa, Hàn Lâm Đông Các, Nội Đài, Ngoại Hiến, Phủ Huyện, Thừa Ti, đặt có Thập nhị Thừa Tuyên. Thiên hạ tối đâu thì nàm đấy[144], chẳng có ai dám ăn cướp trộm gì. Trị được mươi tám năm, liền để cho con là Hiến Tông trị được bảy năm, được mùa no đủ, thì Vua liền mất. Thiên hạ mới đặt con thứ ba lên làm Vua, tên là Thái Trinh. Trị được bảy tháng, chẳng có con, liền truyền cho Đoan Khánh lên làm Vua, tham trai gái, chè rượu, mất lòng thiên hạ ; mới đặt Hồng Thuận lên làm Vua được bảy năm, có Trịnh Sản là Nguyễn Quốc công[145] làm loạn. Thiên hạ mới đặt Quang Thiệu lên làm Vua. Lại có Trần Cao làm loạn, Vua liền sang ở Bồ Đề. Thiên hạ mất mùa. Trị được năm năm liền ra ở San Lâm bề ngoài. Thiên hạ liền lấy em thứ hai lên trị, tên là Cảnh Thống, trị được năm năm, nhà Lê hết.

18. Ngày sau mới có một ở Chè Giai, tên là Mạc Đăng Dong[146], ở làm lực sĩ nhà Vua Lê, tên quan là Đô Giai, có tài, khôn ngoan mạnh khỏe. Thấy nhà Lê đã yếu chẳng còn ai, liền về Xứ Đông làm quân, mà trẩy lên ăn cướp nước, mà đặt mình lên làm Vua, đặt tên là Minh Đức, đời Vua Đại Minh tên là Gia Tĩnh. Nhường vì cho con là Đại Chính. Thiên hạ có phép tắc mà được mùa no đủ, chẳng có ai ăn trộm cướp ai. Trị vì được mười một năm liền chết. Thiên hạ mới đặt con lên là Hiến Tông, lại đổi tên là Quảng Hòa. Trị được sáu năm liền chết, mới đặt con là Vĩnh Định còn trẻ ẵm lên ngồi ngai ; mà chú là Khiêm Vương mọi năm vào đánh Thanh Hóa, Nghệ An, thì thiên hạ được mùa phú quí, chẳng có trộm cướp, đêm nằm[147] thì chẳng có nghe chó cắn, mới đổi tên là Cảnh Lịch, lại đổi tên khác là Quang Báu. Thiên hạ ăn uống chơi bời, chẳng có sự gì lo. Được năm năm lại đổi tên Hồng Ninh, thì thiên hạ cũng chơi bời ăn uống. Song le mê sự trai gái liền về đóng Xứ Đông, làm[148] con nhà dòng dõi công thần, con Vua cháu Chúa, thiên hạ chầu chực, và được mùa liên. Thuở ấy nhà Lê đã hết, còn một ông Hương Quốc công là họ Nguyễn ra đầu làm tôi nhà Mạc. Đến nửa mùa liền trở về Thanh Hóa, làm được bốn trăm quân. Lại có Chúa Minh Khang Thái Báu mồ côi cha còn

---

141 ［原注］nước BuồnはBồn Man［ボンマン：盆蛮］の国のことで、象牙、犀角、銀、布などを貢ぎ物として持ってきていた。盆蛮はのちにハティン省のクイホップ州［帰合州］になる。

142 ［原注］tiến công

143 ［原注］原文はchúa mlòy.

144 ［原注］Thiên hạ tới đâu thì làm dấy.

145 ［原注］Trịnh Duy Sản là Nguyên Quận công（が正しい）。

146 ［原注］Mạc Đăng Dung

147 đêm nằmの誤植

148 làの誤りであろう。

trẻ, ở cùng ông Hương Quốc công, có tài mạnh, ăn một bữa là là[149] một nồi bảy cơm, đi đánh đâu thì được đấy. Bấy giờ ông Hưng[150] cho cai quân, mà lại gả con cho. Ngày sau ông Hưng[151] chết, thì ông Chúa bấy giờ liền làm binh, lấy quân Thanh Hóa, Nghệ An, thì nhà Mạc lại vào đánh trăm trận trăm thua, thì Chúa Minh Khang liền mở ra đóng xứ Bắc được ba năm, mà vua nhà Mạc thì còn ở Kẻ Chợ, chẳng có ai đánh được ai. Chúa Minh Khang mới đặt Vua nhà Lê lên là họ còn trị bây giờ. Tên Vua ấy là Chính Trị. Ngày sau Chúa Minh Khang già thì con cả người đem quân ra đầu nhà Mạc, con thứ hai còn mọn, thì đem được ba nghìn quân vào Lũy Ría cùng đem Vua Chính Trị vào, ở được mười ba năm, giặc thì ở ngoài chẳng vào được. Đức Chúa Tiên ra rước được con vào đặt lên làm Vua, tên là Ja Thái[152]. Vua nhà mạc ở Kẻ Chợ tên là Quang Báu, mới cải hiệu là Hồng Ninh, lại sai quân vào tháo nước cho mất lúa ba phủ Thanh Hóa bốn năm trận, có khi ở chín tháng mới về.

19. Chúa Tiên ở trong Lũy Ría được ba năm, cũng có Văn Vũ, có tài trí cùng có lòng hay yêu thương người ta, cũng hay liệu chước, mà đánh đâu được đấy. Đức Chúa phụ chính vào đánh Thanh Hóa tên là Vua Quang Hưng, mở ra đánh đâu được đấy ; vào đánh Thanh Hóa đến huyện Quảng Xương. Chúa Tiên đuổi bắt được hơn nghìn người đem về cho cơm áo lại tha về. Nhà Mạc từ ấy đến sau chẳng còn vào Thanh Hóa nữa.

20. Ngày sau Đức Chúa Tiên mở ra đánh Đàng Ngoài, trẩy đến Vân Sàng lại gặp nhà Mạc vào đánh. Chúa Tiên liền rằng : ta trở về. Nhà Mạc liền theo, mà Chúa Tiên liền đặt quân ngoài biển, trở lại chém chết bỏ xác đầy bãi cát, mới gọi là trận bái trời, gần Kẻ Vó. Ngày sau Chúa Tiên ra đánh Xứ Tây, cũng giết nhiều người, gọi là trận đồng bún. Quân Chúa Tiên thì chẳng đầy bốn muôn ; quân nhà Mạc thì nhiều lắm, đóng đầy đồng, kể chẳng xiết. Chúa Tiên liền đuổi, Vua Hồng Ninh liền chạy mà quân chết đầy đồng. Ngày sau Chúa Tiên ra phá Kẻ Chợ, bắt được một quan Tướng tên là Thường Quốc công, Chúa Tiên lại trẩy về Thanh Hóa. Vua Hồng Ninh lại sang đóng Kẻ Chợ. Ngày sau Chúa Tiên ra Kẻ Chợ thì Vua Hồng Ninh liền chạy lên ở huyện Phương Nhãn mà xuôi về nhà quê là Chè Giai. Chúa Tiên lại sai quân đi, liền bắt được đem lên Kẻ Chợ. Thiên hạ liền an, mới lại về Thanh Hóa mà rước Vua Quang Hưng ra trị Kẻ Chợ.

21. Họ nhà Mạc thì trốn lên Cao Bằng hết, còn có ai ở đâu thì Đức Chúa lại bắt. Nước Annam đã an hết về làm một nhà Lê mà thôi. Còn ông Đoan là cha ông Thụy ở trong Hóa xưa, thì Chúa Tiên đòi

---

149 ［原注］原文ママでlàが一つ余分。

150 ［原注］ここではHương ではなくHưngと綴っている。

151 ［原注］ここではHương ではなくHưngと綴っている。

152 ［原注］Gia Thái

ra ở làm tôi, mà ông ấy thấy Chúa chẳng yêu đãi cho đủ bao nhiêu, thì ông ấy lại trốn vào ở Quảng, thì Đức Chúa ngờ là về Thanh Hóa ; chẳng ngờ ông ấy đã vào Hóa, thì Đức Chúa theo. Song le chẳng theo kịp, thì lại trở ra Kẻ Chợ mà trị cho đến con cháu bây giờ. Rày lại đánh nhau cùng Kẻ Quảng. Song le chửa biết đời trị loạn[153], thì chửa có tra vào sách[154].

［附記］　本稿は平成23～25年度科学研究費補助金「前近代ベトナムにおける地方行政システムの解明：地方文書の古文書学的検討を通じて」（若手研究Ｂ、代表：蓮田隆志）による成果の一部である。

153　［原注］この文は意味不明である。

154　tra vào sáchはghi vào sach.